

387  
116

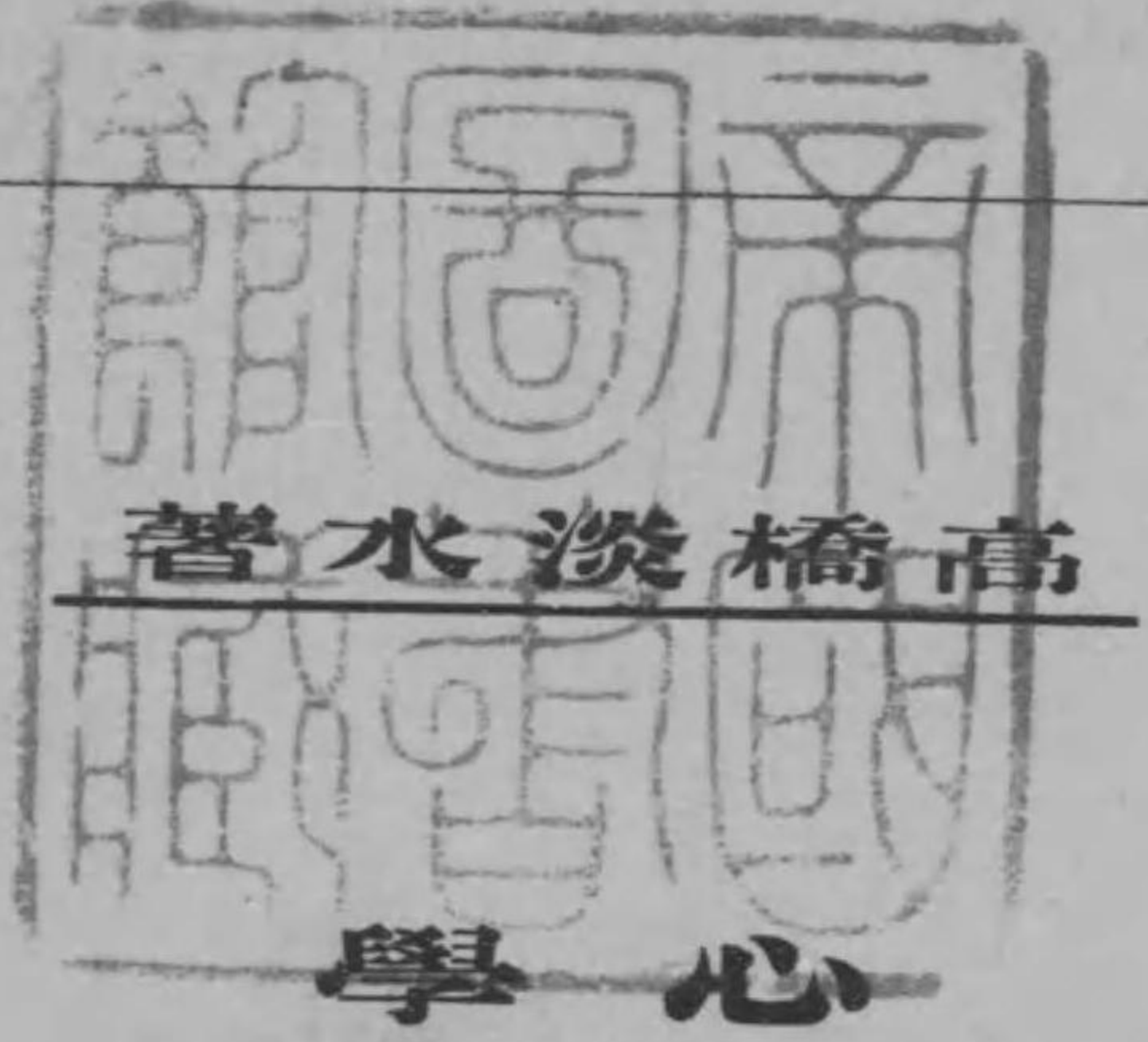


始





387-116



# 修養物語



東京  
下村書房

大正  
9. 3. 25  
内交



自序

心の語原はコロ／＼より起ると言へり。思ふに人心は轉々として極まりなきものなり。されば神儒佛基の教へいづれも修心の工夫を説けり。要するに、人は一心定まりて萬法おのづから明らかなり。心學者嘗て歌ふて曰く、

心こそ、心まよはず、心なれ、  
心にくろ、心ゆるすな。

と、一心の鍛錬それ一日も忽にすべけんや。心學は固と我が國民性に適應する修養の心法を説きたるものにして、石田梅巖これが唱首となり、手島、中澤、布施、柴田、脇坂の英傑、前後相繼いで輩出し、以て斯學を四方に布き、千紫萬紅の美觀を現出せり。而して其の淵源は固と王陽明の學に出づと稱せらるゝも、吾人を以て之を見れば、王氏以外神儒佛の諸教を悉く加味せる一大名教な



り。  
吾人かつて二宮翁の報徳のをしへに感じ、今又、心學に關する諸書を涉獵するに及び、二宮翁の教が心學に負ふところ尠からざるを知ると共に、昔人のいはゆる一書の恩澤は萬玉に優り、一言の教訓は千金よりも重しと云へる言の、ますます眞なるを知れり。

殊に心學の説く所は、日常卑近の實例を擧げて高遠の眞理を道破し、其間によく世態人情の幾微を穿ち、また能く人事世相を色讀し、其説くところは毫も學究腐酸の弊なく、眞に人の肺肝を剗り、老若男女、貴賤貧富、職業階級の如何を問はず、何人にも大悟の一喝を興へ、心境豁然、向上進歩の一路を開拓せしむるものあり。

本書は近世に於る數十種の心學書中より家事經濟、夫婦の葛藤、父子舅姑、繼母繼子、實子養子等の家庭生活より、富貴壽夭の天則、並に職業生活、社

會生活の諸般に亘り、複雑にして然かも其間に條理の一貫せる居家處世の妙跡を、徹底的に道破せる長篇物語を選び、之を時文譯となし、讀者と共に身心鍛鍊の資に供せんと欲す。黒住宗忠の歌に、  
心から生きられもする死ねもする、  
おのが心はおのがまゝなり。

と言へり、心の修養豈一日も忽にすべけんや、所感を叙べて序となす。

大正九年三月

著者識



心學 修養物語

目次

〔一〕精神一倒

- ◎富家の倅……………一
- ◎世話女房……………六
- ◎眞の資本……………二
- ◎正根魂……………四

〔二〕人と猿

- ◎毛が三筋足らぬ……………一六
- ◎思ひ遣り……………一八
- ◎悪魔の業……………二

〔三〕懺悔

- ◎我儘……………三
- ◎義絶勘當……………六
- ◎破落戸はた……………七
- ◎親の心……………九
- ◎心の闇……………三
- ◎改悟……………四
- ◎子善なれば親は佛……………七

〔四〕自惚根性



◎強味が弱味……………三六  
 ◎耽溺派の猫……………四〇  
 ◎裏と表……………四二

〔五〕人真似

◎香物鉢……………四四  
 ◎隣家の師匠……………四四  
 ◎贗物……………四四

〔六〕富貴長命

◎いろいろの氣……………四九  
 ◎酒氣慾氣……………五一  
 ◎悋氣に焼餅……………五二  
 ◎正直木……………五四  
 ◎富貴長命の道……………五五  
 ◎撞木のをしへ……………五九

〔七〕他家相續

◎吳服屋の老夫婦……………六三  
 ◎一人の養子……………六五  
 ◎火に入る夏の虫……………六六  
 ◎養子と障子……………六八  
 ◎此の道理の分別……………七〇

〔八〕猿澤の池

◎熱湯……………七一  
 ◎毒藥……………七二  
 ◎猿澤の觀音……………七五  
 ◎池の明月……………七六  
 ◎あらッ姉さん……………八〇  
 ◎繼母の懺悔……………八二

◎自惚女……………八六  
 ◎女わらべ……………八九  
 ◎赤子の心……………九一

〔一〇〕齋家の道

◎三綱八目……………九六  
 ◎夫婦和合……………九七  
 ◎せんなの僭上……………一〇一  
 ◎信心……………一〇三

〔一一〕金剛心

◎或る農家の娘……………一〇五  
 ◎一夜の寝物語から……………一〇七  
 ◎魚のあたま次第……………一〇九

〔一二〕和歌の徳

◎井戸底に女の聲……………一一〇  
 ◎蘇生つた娘……………一一三  
 ◎天意人言……………一一四

〔一三〕夫婦喧嘩

◎境遇の子……………一二七  
 ◎本は色情から……………一二九  
 ◎遣り付けぬ仕事……………一三〇  
 ◎心はコロ／＼……………一三二  
 ◎一字千金の歌……………一三三  
 ◎今日の有難さ……………一三六

◎歌人の氣轉……………一二九  
 ◎面白い歌の争ひ……………一三〇  
 ◎歌と四季の心……………一三三



◎例の十八番……………一三四  
◎反省のちから……………一三六

〔一四〕天命

◎本心と私心……………一四一  
◎天命の誤解……………一四三  
◎放蕩息子……………一四四  
◎放心一點張の者……………一四六

〔一五〕方針

◎柳は緑に花は紅……………一四〇  
◎劍先のキリ／＼……………一五一  
◎警語……………一五二

〔一六〕心の鬼

◎數の子に本耳……………一五〇

◎恐ろしい企……………一五五  
◎只はい／＼の行……………一六〇  
◎人の心はかゝみ……………一六一  
◎鬼を佛にした……………一六四  
◎口ばかりでは役立たぬ……………一六七

〔一七〕犠牲

◎烈女の一心……………一六九  
◎何事も志一つ……………一七一  
◎一家離散の後……………一七三  
◎烈女の感化……………一七五

〔一八〕慎獨

◎君子と小人の別……………一七九  
◎家の礎……………一八〇  
◎貧寺の和尚さん……………一八二

◎一番草、二番草、三番草……………一八四

〔一九〕三幅對

◎職業替……………一八六  
◎山師……………一八九  
◎當世醫者……………一九二

〔二〇〕若い手代

◎無分別……………一九七  
◎霞町の茶屋入り……………一九八  
◎敵討狂言……………二〇〇  
◎伊兵衛、佐兵衛……………二〇一  
◎目のある主人番頭……………二〇二

〔二一〕寒梅

◎所は防州岩淵の里……………二〇五

◎佳人お石の親……………二〇七  
◎嫁は歸ること……………二〇八  
◎悪魔拂……………二一〇  
◎お石の石心……………二一一  
◎春風秋雨十一年……………二一四  
◎父も泣き母も泣く……………二一六  
◎深夜にお石の泣聲……………二一九  
◎本願寺の一使僧……………二二一  
◎毛利侯の感賞……………二二四  
◎流石非道の良人も……………二二五  
◎春はこゝなり梅の花……………二二六

〔二二〕心の塵

◎日新の語……………二二八  
◎潔癖家……………二三〇  
◎面長の奥さん……………二三三



◎正月の三つ来る顔付……………二三四  
◎いろ／＼の氣質……………二三五

〔二二三〕大根賣

◎大根！大根……………二三七  
◎兩國橋畔……………二三八  
◎目に付く銅盥……………二四一  
◎大根の下の銅盥……………二四三  
◎櫛巻頭の女房……………二四四  
◎心を洗への一言……………二四八

〔二四〕信心

◎彌陀超世の悲願……………二四九  
◎稱名……………二五二  
◎割利生……………二五四  
◎お座の約束……………二五七

◎御開山の御苦勞……………二五九  
◎蓮如上人の御歌……………二六一

〔二五〕福分福相

◎人相と心相……………二六二  
◎酒色の相……………二六四  
◎美望の相……………二六六  
◎短氣短命の相……………二六九  
◎辛抱が寶、勸忍が金……………二七一  
◎無慾無心の相……………二七三  
◎福壽満々の布袋和尚……………二七五  
◎ニコ／＼と福相……………二七六  
◎秘密口傳……………二八二

〔二六〕大黒天

◎頭巾取つての大黒様……………二八六

◎相者陳搏の言……………二八七  
◎相は心……………二九〇  
◎大黒天の言……………二九二

〔二七〕金看板

◎煙草盆……………二九四  
◎朝から晩まで一切經……………二九五

◎報ひは書き出し……………二九七

〔二八〕日月の教

◎運不運……………二九九  
◎天運……………三〇〇  
◎開運出世……………三〇四

心學 修養物語終



學心  
修養物語

高橋淡水著



(一) 精神一到

富家の伴

或る心學者の家に、年の頃は七十ばかりなる一老人。うら若き色白の男を伴

「先生。これなるは私の主人で、蓮野實之助と申す者でござります。また私は忠左衛門と申す者です。今日罷り出ましたのは、此の若主人が近來遊興の味を覺え家業を疎かにいつも飛び出されますので、親類縁者が幾ら

精神一到



意見しても、お聞き入れありません。何卒先生の御意見によつて御改心になるやうに致したいものです！」

「如何にも、一體此の若主人のお年は幾つか？」

「二十四歳になります」

心學者は眼鏡を取り出して、ツクムと實之助を眺め

「如何にも是は瓢箪病だ！。瓢箪病といふ奴は、難治の病で、いかに良薬の

意見も餘をおさえる様に只ヌラクラとして用ゐぬから、縦令よい身代でも

成り下つて身が軽うなり只ブラ〜と流浪困窮すると云ふ病氣ぢや」

之を聞いて、實之助大に腹を立て、

「入らぬ御世話だ。私が幾ら遊んでも一年に僅に千圓か二千圓あれば澤山で

私の家の身代には何でもない。銀行への預金もあれば貸付もあり。公債も

あれば株券もあり、其上田舎には山も、畑もいろ〜と家督があるから、

こゝ十代や、二十代遊び暮らしたとて潰れる身代でなし。正か貴下の所に無心にも來ぬから、餘り失敬な事を言はツしやるな！」

氣儘一途の根性から、遠慮會釋なく言ひ募るを、心學者は聞き流し、

「然う怒るからには未だ脈がある。ソロ〜療治して上げやう。能く耳を

さらへて聞きなさい。目腐り金の五十萬や、百萬の身代を大きな事に思つ

て、十代や、二十代も長久とは能くも吐かした。貴様の身代に比べたら、

富強は世界を壓したる羅馬も驕りの果ては亡んで了ひ。平家の咲りも宗盛

の愚昧と驕りで亡び、北條九代の家督も高時のおごり無道で滅んだことを

知らぬか。貴様の身代を之等に比べたら、大海の一泡沫。それに口廣い事

を吐かし居る。馬鹿も休み〜言ふがよいせ！」

と實之助をジリ〜眺めながら、更に言葉を續けた。

「能く聞かツしやれ！。家督といふのは金銀や家屋敷や田地よりは自分々



々の性根魂だ。源頼朝は此の性根玉を以て浪々の身から右大將になり。カ  
ーネギーでもロイド、ジョーヂでも歸する所は此の性根魂からアレ丈の事  
を出來した。さるに、貴様は僅かな金銀財産を持つたとして、肝心かなめ  
の性根魂が腐つて居るから、蟬の脱殻同然。不惑ながら成り下つて仕舞ふ  
ぞ！」

實之助は聞いて怒氣ますます募り、其額に青筋を立て、

「随分君は失敬なツ。言はせて置けばツケ上るにも程がある。此の實之助  
は之まで君の様な人に會つた事がない！」

「如何にも會つた事はあるまい。皆蔭では悪口しても、表面では旦那々  
と追従を並べるからぢや！。先づ氣を鎮めて性根魂の事を聞きなされ。一  
體君は石部金吉の話を知つてござるか？」

思ひ掛けない間に實之助は呆れ返つて、

「石部金吉？」

「如何にも！」

「石部金吉金甲と云うて手堅い者に譬へるだけは……」

「では金吉に何ういふ話がある？」

「それは知らぬ！」

「だから物が解らぬ。聞きなされ。金吉には確ツかりした性根魂があつた  
それは或る夜のことであつた、金吉の家に盜賊が入つて、金吉が日頃儉  
約して溜めてゐた三百兩を奪つて仕舞つた。スルト、隣りの遊美泰庵とい  
ふナマクラ醫者で、有れば有るだけ酒にしてしまひ、米櫃に米のある間は  
病家から迎ひに來ても往かぬといふ怠け者が、氣の毒に思つて、金吉は喰  
ふや食はずに溜めた金を奪られては、嘸かし氣が觸れて居る位に思つて見  
舞に出掛けて見ると、金吉は平氣の平三で、何日にも變らず。金甲の實業



を罵んでゐた。之には流石泰庵も驚いて、貴様は魂消た奴ぢや。アレ程に辛苦して溜めたものを取られて平気で居るとは、古今に稀なる豪傑ぢやと言うと、金吉は笑ひながら、取られたが金を拵へる元手家督は残つて居ります！。私共は生まれ付いて、不精横着が大嫌ひで、儉約に家業を稼ぐ事が大好といふ性根魂の家督があるから大丈夫です。併し貴下はこゝで千兩二千兩と人から貰うても酒や、女や、遊ぶ事が大好で、家業が嫌ひだから幾らあつても駄目です。貴下が貰うより私が取られた方が仕合ですと答へたといふが、實之助さん！。一體どう思ふ。貴殿は金吉黨か泰庵黨か、一つ胸に手を當てて考へて見なされ！」

世話女房

實之助が金吉の話の聞いて我が胸にこたへ、疑つと聞き居るを見て、心學者

は迷の覺むるを喜び、

「實之助君！。一つまた君に聞きたい事がある。君が一族の中で、一番大切に思ふ人は誰ぢや？」

「それは此の忠左衛門といふ伯父の番頭です」

と答へて忠左衛門を指す。

「其れなら此の忠左衛門さんに毒藥を飲ませて、デリ／＼命を取る人があつたら、君は何うしなさる？」

「其様な不埒な奴が居たら酷い目に會はせて呉れます！」

「其れなら教へて上げやう！。此節しきりに忠左衛門さんに毒を飲ます人がある」

といへば實之助は驚いて、

「それは早く教へて下さい、何處の何といふものです。」



「では教へて上げやう。其人は蓮野實之助といふ人だ！」  
 「へえい、私が……何うして？」

「それは實之助といふ奴が瓢箪病にかゝつて、忠左衛門に旦暮心配させ、氣の毒といふ毒薬を以て命をちよめて殺しかけて居る。杖を以て殺すも、刃を以て殺すも同じ事で、真綿でデリデリ首をしめて殺すのも、心配苦勞させて壽命を縮めさせるのも殺すに違つた所はない！」  
 實之助は之を聞いて大に悟り。

「私は計らず御教を承つて、全く夢が覺めたやうに成りました。何卒此上に教を願ひます」

と心の底から感謝すると、心學者はますます喜んで、

「さうお解りになれば私は満足する。尙お心得のために管々しいが、性根魂の元手に就いて一つのお話をしませう。私の知つて居る或る田舎に兄弟

の者が居た。五千圓ばかりの身代を兄は三千圓、弟は二千圓貰つて、弟の方は別居すること成つた。さるに、兄はお人好といふ計で意氣地がなく、人から無心を言はれると直ぐ金を貸し取られ農業にも怠けたので、父の遺産は次第に減り果ては田地も残り少なに成つて來た。さるに弟の方は好智に長け、いろ／＼非道な事をして金を拵らへた。すると、或時兄は租税の上納に迫つて、弟に三十圓の無心を持ち出して、朝から晩まで口説き立てるを五月蠅がつて、散々に悪口を並べ立てたが、兄は切迫つまつて體面もあらばこそ、さらに弟の妻に嘆きかゝると、弟の妻は、親譲りは過分に貰ひながら、重ね／＼の無心とは白々しい。貸す譯には往きませぬ。之を上げますと言つて五十錢銀貨を投げ付けた。

實之助は聞いて餘所事とは思はず。  
 「それは如何にも酷い女房。其れから何う成りました？」



「さあそれが運悪く兄の額に強く當つたから兄は一目散に我家に駆け付け、箆筒の脇差取つて出掛ける所を其の女房が引き止めて何うなされますと聞くこと、ただ泣き咽び、やがて、弟めが今朝から晩まで頼むでも一向に聞いて呉れず散々に悪口した上に、弟の女房めが五十錢銀貨を投げ付け、此通りに疵を付けた！、彼等夫婦を殺して、自分も死んで了ふ。離して呉れど藻掻く所を、其の女房がなか／＼の偉物で、お腹立は尤もです。しかし急いで仕損じます。良人が命を捨てなされば妾も生きては居りませぬ。夫婦一緒に夜中に押し掛けませうと言うて押し止め。良人を得心させ。さらに、此度は意外な事で死なねば成りませぬから、之まで大恩うけた賣残りの田地の見收めに参りませうと言うて、夫婦連行きて名残を惜む中、妻は思ひ返して、私は今の今までこの田地が大恩あると思つて居ましたが、實は此の田地が私等の敵です。一體私等夫婦が死ぬのは弟夫婦の邪見から

起り、其本は年貢につまつた爲で、年貢に詰つたのは此の田地の不作からの事です！。弟夫婦は枝葉の敵で、幹の敵は此の田地ですから、弟夫婦への遺恨は後廻にして、先づ此の田地めを鋤鋤で粉な微塵にして遣りませうと言うこと。良人も得心し、其の翌日から未明に起き出で、鋤鋤を執つて、此の田地めの不作からと言ひつゝ、憎げに土を掘り起し、且つ打ちくだきつゝ、五十日も働く中に、見る／＼田地の相が變つて来たから妻はさらに先達から腹立ち紛れに耕やしたから、田地が大層よく成りました。此向では今年はきつと豊作です。之を思うと敵の根本を田地と思つたのは勘違で、田地の知つた事ではありませぬ。只之まで浮々と暮らした爲です。殊に私が長年つれ添ひながら御意見も致さず。貧乏にさせましたのは全く私の罪で、弟夫婦や田地の知つた事ではありませぬと詫ると、良人は、成程我等が命を捨てやうと思つたのは、弟夫婦の邪見のため、其本は金に詰つた爲



め、また其本は田地の不作のため、田地の不作の本は野良仕事の不精のため。愆う考へると、罪はお前でもなければ、田地でも無く、また弟夫婦でも無い！。實は私が悪かつた長い間の夢が覺めた。其後は我が身を我が敵と定め、朝眠むければ、貴様のやうな奴に朝寝させるものかと自らを戒め、夜も早く眠くなる。貴様のやうな憎い奴に早く寝させるかと戒め、物見遊山に往きたい折には、浮々遊ばすものかと戒め、一事が萬事、此の筆法でゆく中に、家は再び榮えて舊の長者となつた」

此の長々しき物語を實之助は疑つと聞いて、ツグツグ感心し、

「如何にも感心な話です。しかし、一方の弟の方は其後どう成りました？」

眞の資本

心學者は一寸と濫茶を啜りながら、

「お聞きなさい！。兄の方が榮えゆく頃、弟の方は次第に衰へて、果ては今日の煙も上げかぬ様に成りました。スルト、兄の女房は心掛の善い丈に痛しう思ひ良人に向ひて、弟に五百圓ばかり貸して遣りなされては何うですと勧めたが良人はナカク聞き入れず。弟夫婦は僅な無心を聴かず、散々に悪口し、其上疵まで負はせたものを、今更金を與る譯がないと答へると女房は言葉變しう、然う仰しやらずとお遣りなさい。日外無心の節に金を借りて居れば、ホンの當座のがれで今頃は何うなつて居るか解りませぬ。弟夫婦の邪見が資本になつて、性根魂を入れ易へて今日の仕合になりましたと言へば、良人は手を拍つて、如何にもアレガ運びらきの資本であつた。資本といへばたゞ金錢の事のみと思ふのは間違ひちやと答へ、直に五百圓を携へ、久方ぶりに弟夫婦を訪ね、一伍一什を物語り之を渡すと弟夫婦は兄夫婦の善心に化せられ、泣く泣く其恩を謝し、誠に辱う思







(二) 人と猿

毛が三筋足らぬ

布施松翁の教に「銘々ごもの様なものは、今日の鼻の先の名利名聞にふけり世界の者に我が名が聞かせたいと云ふ所から、急に金が欲しくなり、利欲にまよひ、人の合點せぬものまで集めて、我物とするから、終には子孫斷絶、跡形もなくなつて仕舞ふ。

山猿が腰に繩ざれや、藤かづらのやうな物を巻いて、粟や、黍や、稗などを盗みに来る。精出して折つては腰繩にハサミくして歸らうとするがさて動かない。

動けぬ筈ぢや。折るは折つたれども、折つたばかりで地から離れずにある。

皆根が付いて居るから動かれぬ。そこを人が目ツけて、棒でタ、き殺して仕舞ふぢや。

ぢやによつて人の合點せぬものは、天の合點せぬもので、皆根が付いてをるから、後で難儀する。猿は猿智慧というて、たゞ物を欲しがるとり。恥を知らぬ。人間に毛が三すぢ足らぬ。慈悲と、智慧と、正直との三つが無い。

人と話して居るかと思へば、足で物をぬすみ。うしろに隠して逃げてゆく。後からはよく見えて居る。借錢してもよい形をしたがるのも、後から能く見えて居る事知らぬ。一生恥の搔きごほしで、それで顔が赤い。鼻先ばかりの利慾に迷うて、皆後から難儀のまわることを知らぬ」と言うて居るが、如何にも面白。

人間も進化論者の眼から見れば、猿の進化したものであるから、日進文明の今の世の中にも、慈悲と、智慧と、正直との三筋の毛の無い奴が、都會と言は



す。田舎と言はずしては、歐米大陸と言はず、到る處にウロ／＼して居る。傳染病の其れの如く世界に雪崩を打つて、流石のロイド、デヨーヂや、ウキルソン、クレマンソー、乃至、日本の經世家の頭を悩まして居るのも、歸する所は三筋足らぬ代物の多い結果だ。

思ひ遣り

所は佛國の或る一公園に、面貌の瘦せ衰へた一人の正直げなる男、一塊のパンを手にし、園内のベンチに腰打ち掛けて、今や其パンを味はんとする刹那、飢に疲れて弱々しげなる男たどり來りて、ベンチに腰を下すと、前なる男、痛はしう思うて、

「憚りながらおん身の容子は如何にも飢に疲れた御氣色、このパン喰べて飢を凌ぎたまへ！」

と差し出だせば、後なる男は嬉しげに。

「誠にかたじけなう存じます。さらば、早速頂戴いたします。」

斯くて、彼は一塊のパンに勢を得て、  
「美味しく頂きました！。實は昨朝以來、一塊のパンをも食ひ得ないで、飢死する場合を、君のお情で露命を繋ぎました。」

と言ひ訖りて、相手の顔を見ると、己に優りて飢に疲れた様子であつた。彼は驚いて、

「君の御面色は如何にもお悪い！、お心持はいかゞですか？」

と聞くと、其男は答へた  
「實は私もお腹が空いて何うすることも叶はぬやうに氣が滅入つて仕舞ひました。」

「それはお氣の毒さま。一體あなたは何時から空腹を耐へて居られますか？」



「私は三日以前から一片のパンさへ食はずに居ると、たま／＼一塊のパンを貰ひましたから、それを食はうとする所へ、君がお出でになつて如何にも飢いに見受けたから差し上げた様な次第です。」

之を聞いて、パンを貰ひたる男は打驚き、

「私はたゞ昨日から飢い目をして居る計です。それに貴下は三日以前から何も召し上がらないで、自分を捨て、私を恵みなさるとは、如何にも大慈の佛様です。此上は何うぞ私に背負はれなさい。こゝから十町も行くと、澤山の金持が軒を並べて居ります。彼處に往つて何か食物を貰つて貴下に差し上げませう！」

といへば、パンを與へた男は、忽ち頭を振つて、

「それは駄目です。私は三日の間飢え切つて、ツク／＼と我身に難義を嘗めて居るから、君の御難儀を察して、我を忘れて差し上げたのです。つまり

自分が三日も飢い目をいたしたから、君の昨日からの不自由を思つたのです。されど富家のやうに腹の膨れた人は、難儀な人達の腹の底を知りませぬから、思遣り情もなく、逆も食物を呉れる氣遣はありませぬ。御覽なさい。遊所に煙たえず。物價騰貴よ、調節よとか、何んの角のと言ひながら、高値の酒、肴、水菓子の繁昌するのは、飢渴の苦みを知らぬ富家の人達の施行ですから、逆も我々の様な貧人にまでは施行が届きませぬ。されば、君も食を貰ひ給ふならば、かへつて貧家のあたりに行きたまへ。貧人こそ同情あつく物を呉れますから………」

と云ふ物語がある。

### 悪魔の業

まこと世の中は此の食を與へた男の申分ごほりで、我が身に覺えなきことに



は兎角疎いものである。

富める人々の中にも、情深く、よく道理を辨へる人もあるが、たゞ我が身に受けし難儀を知らず、人の噂や、書物の上で見ればかりで、パンを興へたる人の如く、我を忘れて人を助くる程の人は少い。

十人に一人でもこういふ人の志の十分の一でも有つて居る富家の人があれば、天祿ながく、子孫繁昌する筈である。

さるに、己が腹の膨るゝまゝに、人の難儀を顧みず、身をおごり、酒色にふけりて、貧人をいやしめ、氣随氣儘をして、おのが身の亡ぶべきを知らぬは、全く悪魔の業といふべきである。

有るや、無しや。三筋の毛の詮索こそ肝要なれ。

(三) 我儘悔

我儘

去る田舎に相應に暮らす農家があつた。米價は上がる。養蠶は當たると云ふ所から、一層に景氣ついて來た。

家には男の子が只一人。可愛さの餘りに、宛然牛が子をねぶる様に育て上げた。

そこで、其伴は年の進むに従ひ、次第に横着者になり。氣随氣儘の遣り放題隣近所の子供を虐めたり、泣かせたり、腕白の限を盡した。

成長するに従ひ、馬鹿力があり。料理屋酒は飲む、博奕はうつと云ふ有様であつた。



此の有様を見ては、流石に父も母も呆れ返り、

「最うよい年頃になつて、何日までも子供ぢやあないし、少しは定らなければ、一體お前は何ういふ了簡ぢや？」  
と誠めても、一向に聞き入るゝ氣色なく。

「お父さんや、お母さんは、日頃私を放蕩者だの、不孝者だの言うて叱るが、一體この不孝者や、放蕩者は誰が生みなされた。私は生んで貰うて迷惑してをる。其れ程に放蕩者が嫌ひなら、元の所にチャンと收めて下さい。然うすると私も助かります！」

箸にも棒にもかゝらぬ口答へ。其中に兩親は共に年は寄る。此子はますます善からぬ事をする。其れでも親子恩愛の情といふものは格別で、父親が母親に向ひ、

「何うも困つた者ぢや。あれの爲に俺は日がな一日ごれほど苦勞するかも知

れぬ。」

と嘆息すれば、母親は、

「しかし、生みの子ですから致方がありますね。」

と慰めつゝ其日々々を不愉快に送つて居ると、息子はますます募り喧嘩争に日を送り、村々の者が寄ると集ると、

「恐ろしい悪黨もあればある者さ。胎の内からあの様な腕白者でもなかつたらうが、我儘が増長した計でアンな難作になつた。」  
と噂するまでに至つたから親類仲間も持て餘まし

「あれは勘當して仕舞ふ外はない。」

と勤めると、父も、母も、

「いよく明日から勘當して仕舞ひます！」

と口では義絶よ勘當よと言つても、腹の中はナカ／＼承知せず、明日々々



言ふ中に、其子は二十六の春を迎へた。

義絶勘當

年は取つても一向に身は治まらぬ。悪行は彌が上に募る。此向では親類縁者に何ういふ迷惑をかけるかも知れぬといふ慾と怖氣から、縁者一同は相談の上、「明日々々と言うて何日までも勘當をなさらぬと、親類一同と義絶なさらねば成りませぬぞ。其れでも御得心で御座りますか？、あの子をあの儘にして置きなさんと。我々親類や、村中にドレ程の迷惑がかかるかも知れませぬ。貴下がた御夫婦には聊か恨はござらぬが、銘々家が大事ぢやによつて義絶を願ひませうか？、其れとも彼の子に勘當なさるか？、二つの中で一つの御返事を承りたい。」  
此の凄い文句を見ては、流石に兩親も當惑し

「子の放埒から親類一同に義絶されては、第一先祖に對して濟まぬこと。今晩皆様達、どうぞ拙宅に寄り合つて下さい。相談の上で廢嫡の願書を認めますから、親類の何れも御連印を願ひます。」  
と云ふ返事を送つた。  
番に人間のみならず。生物は子の可愛くない者はない。親は勘當したくは無いが、子の方から勘當して呉れと迫るも同然、此の息子は其心の光明を失うて居る。

破落戸はだ

さるに、野良息子は此日近村で博奕を打つて居ると、偶々一人の友達が駆け付け、  
「おい、貴様大變だぞ。今晚貴様の親類達が寄つて集つて、貴様を親から勘



當させる相だぞ、幾ら貴様でも勘當されたら難義するだらう」  
野良息子は皆まで聞かず。

「勘當の評定か？。こいつ甘いぞ。全體親爺や、母の面を見ると溜つたもので無い。勘當されたらモツケの幸ひ、一本立だ。支那に飛ばうが、印度に飛ばうが、南洋、アルゼンチンに往かうが勝手次第。誰ぞて咎め人が無い。有難いぞ、辱ねいぞ。ヨシ今晚は評定の席に乗り込むで、何んで俺を勘當すると揺り懸けたら、百兩や、貳百兩は早や巾着に入れたも同然。一つ前祝に一盃遣らかさう！」

類は友を呼ぶ同じ仲間の破落戸肌と徳利から茶碗酒をアフつて、グデン／＼に酔つても、流石本性違はず。

「これ此勢で一ト勝負張つて来やう！。最うソロ／＼親類の奴共も来て居るに相違ない。」

と云ふ臺詞を残して家に歸つた。

親の心

斯くて、我家近く来て、一ト思案。

「今時は親類の奴等が、無い智慧の底をハタいて評定を始めて居るに相違ない。其處に飛び込むでグズつたら、否應なしに金に有り付ける。併し親類の奴が皆俯いて評定して居る所に飛び込むで大きな聲を掛けるのも曲が無い。俺の事を色々下なして居る時に飛び込まぬと揺りが利かぬ。一つ裏の藪に入つて座敷の評定を立ち聞きして、俺の事を存分悪口して居る時に戸障子を蹴破つて、大雷と出かけるがよい！」

蛇の道は蛇懲う考へ直して、雪踏を脱ぎ腰に挟み、尻からげして、裏の藪から椽先に廻つて見ると、座敷は打濕つてヒソ／＼話。



雨戸の隙から凝つと覗いて見ると、親類一同が車坐に直り、銘々に願書に判をしてゐた。斯くて、其の願書が兩親の前に来ると、野良息子は息を殺し、

「此上は親爺が判を押す時に踏ん込まう。」

と凝つと構えて居た。

習ひ性となる。人の習慣は恐ろしいものである。

人の親の、心は暗に、あらねども

子をおもふ道に、迷ひぬるかな

で、親達の前に勘當の願書が来ると、母は聲を立て、泣き、父は齒も無き齒莖を喰ひしばつて俯ぐ。やがて、曇つた聲で、

「婆々印形を持つてござれ！」

母は聞いて言葉も出で兼ね、泣く／＼箆笥の抽斗から革の財布に入つた印形を父親の前に置いた。

野良息子は凝つと其の様子を見ると、父は財布を解き、今に印を押さうとする刹那、母は其手に縋つて、

「少し待つて下さい！」

「なに此期に及んで未練な事を言はッしやるな。」

「でもまあ私が言ふ事を聞いて下さい。」

と啜り泣きながら、

「あの不孝者に家を譲つたら、三年と経たぬ中に家を形なしにして仕舞ひませう。なれど、天にも地にもタツタ一人の子を勘當したら、跡に代りを貰はねば成りませぬ。其の貰うた養子が實體なら、私等夫婦に孝行もして呉れませうが、養子は慥に孝行とは定つて居りませぬ。若し養子が世間にある様に不心得で、家を形なしにしたら仕様がござりませぬ。同じ子ゆゑに潰す身代なら伴のために家を失ひ私等夫婦は袖乞にならぬとも、我子の尻か



ら付いて歩いたら、私は本望に思ひます。五十年このかた一生に一度のお願ひ、どうぞ聞き入れて勘當をやめて下さい。子ゆゑに乞食をすと思へば露恨みませぬ。」

聲を上げて泣く光景を見ては、流石に親戚一同も互に顔を見合せ、父親か何を言ふかと凝つと見て居た。

心の闇

すると、父親は印形を財布に入れ手早に財布の紐を締めて、願書を親類一同の前にかへし。

「誠に皆様方に對して面目なき事なれど、今婆々の言ふこと尤に思ひますから、あの伴は勘當いたしますまい。慙う申すと、其の甘い心で育てたから彼様な不孝者が出来たと笑ひなさうが、笑はれても私は苦しうござりませぬ。」

せぬ。あの伴を勘當せねば此家が潰れる事は三年と経ちますまい。なれども我子ゆゑに先祖代々の家を野良にするのは、先祖代々に對しても濟まぬと云ふ事も能う合點して居ります。また勘當せねば親類の皆様方と付合が出来ず。義絶されるのも合點で御座ります。私共一黨が此村を立ち退く時無心でも言はうかと、其の用心の義絶もありませうが、其儀は必ず案じて下さるな。世間の義理も、先祖への不幸も、親類の義絶も顧みぬのは、子が可愛い計りで、子の尻から乞食して付いて歩く事も構ひませぬ。何で死ぬるのも一生と想うて、可愛い子の爲に大道にノタれ死するも、子ゆゑに好んでする事なれば一向に構ひませぬ。何うぞ皆様方お引取なされて下されませ。明日からは義絶で物も言ひますまい。之も可愛い我子のためで……………」

と大聲上げて男泣きに泣くと、母親は勘當せぬと聞いて、嬉し泣きに泣くの



であつた。  
親類一同は餘りの事に呆れ果て、たゞ夫婦の顔を見るのみで、一座は森と  
してゐた。

改悟

親の子に迷ふ心は實に哀なるものである。恰も猫が子を喰へて歩くやうに、陰  
になり日向になりて、人の譏も、先祖への義理も、我身の詰る行末も構はず。  
其の心は實に痛はしども痛はし。

されば、此の大慈大悲の親の情が、野良息子の五臟六腑に染み渡ると、流石  
に鬼の様な横着者も、咽せ返る涙を袖口に抑へて、大地に仆れて男泣に泣いて  
ゐた。

「此上はすぐさま座敷に入つて詫び入る外は無い！」

野良息子は覺悟を決めたが、やがて、又思ひ直し、

「此儘に駈け込むたら親類一黨が驚き、如何なる事をするかと、親達に苦勞  
をかけるに相違ない。それよりは尋常に表口から座敷に入つて、親類から  
親御に詫びて貰はう。」

斯くて、忍び足で表に廻つて、態と雪踏の音高く、咳拂ひして家に入り、躡  
て座敷に通ると、親類一同は驚き、両親は我子の顔をチラと見て、ますく泣  
き悲む。

野良息子も情迫つて、何事も得言はず、差し俯いて泣いてゐた。稍あつて

「叔父様方、之までたびく勘當々々と承つても、左のみ心配せず。只浮  
々と暮らして居りましたが、今夜の寄合を承つて、何ういふものか心細  
うなりました。之までは不調法の遣りつけで誠に済みませぬ。此上はキ  
ツと心を入れ換へて改めますから、何卒今夜の勘當は許して下さい。併



し長くとは申しませぬ。僅か三十日の日延べをして下さる様にお詫して下  
さい！」

例になく頭を疊にスリ付けて詫び入る。親類一同は親達の手強い返答に、座  
は白らけて立つに立たれず。拍子抜けした所であつたから、此の野良息子の詫  
を瀬に口を揃えて、

『今夜の所は待つて遣つて下さい。』

兩親は元より本心に立ち歸りさへすれば勘當せぬ覺悟、況して、今の一言を  
聞いて一層に嬉しさが交つて泣き咽ぶのみであつた。親類は亦茲を瀬に、

『どうぞ孝行して下さい。』

と言ひ終つて、此夜の評議は濟んだ。

爾來この野良息子は、宛然手の掌を返へすが如く、其行が改つて孝行な子  
となり、兩親に事うる有様は、赤子の父母を慕うが如き有様となり、遂には擧

げられて、地方の名譽職となつた。

### 子善なれば親は佛

かくて、二年の後に其母が大病に罹つた時、枕邊に呼んで、

『何日ぞや、勘當の相談の時に、お前が何おもふたか、志が改まり、此上  
もなう孝行をして呉れた。若し彼時お前の心が改まらず。其内に私が死ん  
だら、地獄にゆく外はない。今はお前の孝行で何等此世に思ひ残す事なく  
極樂に往ける。之は皆お前の孝行の爲ちや。』

と手を合はせて拜みながら臨終をしたと云ふ。

佛説に當來の果を以て未來を知ると、此世で心苦ければ未來も又心苦しい。  
今日の手おくれは明日に付いて廻る。心の苦しいは地獄、心の樂は極樂、親の  
苦樂は子たる者の所作にある。子善なれば親は佛、子惡なれば親は鬼となる。



されば所謂若氣のあやまりで、何の分別なく、親に心づかひを掛けたり、親を泣かせたりする不孝者は此理を辨へて、今日たゞ今、其志を立て直し、我身に立ち返つて孝行すれば、親は今日から極樂ぐらし。地獄極樂はたゞ其身に立ち返ると返らぬことによる。

(四) 自惚根性

強味が弱味

人間といふ動物は自惚で生きまた自惚で仆れる代物だ。勢力ある政治家は其の勢力に乗り過ぎて、やがて其の勢力を失ひ。學者は其學に誇つて其徳を亂し、美しき女は其美しさに誇つて、反つて其愛を失ふが如き例は頗る多い。

さる頃に或る妓樓の遊女が、彼等に共通の收攬術で、幾多階級の遊蕩兒を七擒八縦した物語り。聞いて見れば如何にも首肯される。

言ふまでも無く、遊所通ひの鼻下長には、種々雑多の男がある。中にも藝能自慢で、都々逸も呻れば義太夫も囀るものが來ると、其の遊女は

「妾は嘘いつはりは決して申しませぬ。實のところ貴下の顔には惚れませぬが、藝にはツク／＼惚れました。郎君の様な人に添うて居たら、何日も晴々した春の様でせう！」

と出る。相手はホク／＼もので、  
「此女ナカ／＼話せる。俺の顔はテンデ物に成つテヨらぬ。併し藝に惚れた

と云ふからには嘘であるまい。」  
と獨合點して以來通勤が繁くなる。  
また美男子ごのが御入來になると、調子を代へて。



「同じ一生を暮らすなら、郎君の様な器量のよい方に添ひたいものです。錢金などは要りませぬ。」

と遣らかす。スルト、美男子、人知れず窃に懷中鏡を取り出だし、凝ッと鏡に映る姿に見入つて、

「天下の美男子、たゞ我と汝とあるのみ。彼女の熱の高まるも當然だ。」  
と自分で自分の顔に惚れて、有りもせぬ墓口をハタキ始める。

### 耽溺派の猫

また黙まり猫の耽溺派の先生が遣つて來ると、

「郎君は實に感心なお心掛です。一體女は氣の小さいものですから、郎君の様な學問の廣い方の側で、何角と御講釋を聞きましたら、自然と氣が廣う成りませう。幾ら美男子でも、浮氣な人を持つたら、一生胸の痛め通して

す。」

と出かける。耽溺派先生、ニタリ／＼と脂下つて、下宿の机に向ひ萬年筆を走らせつ。

「遊女とて悪魔の生まれ替りにはあらし。さる仔細あらばこそ彼の流れに落ちて、嘘のあり丈け串戯に日を暮らせども、彼女は我が堅き氣性を見込みて……………」

云々一葉モドキを書き始め、正直一圖の心から深入して了ふ。  
また太ッ腹自慢の成金に出會はすと、其の人柄を讀んで、

「郎君の様に大氣では要らぬ所に費用が要りませう。少しはお極まりなさ

い。」  
とチヨイと厭味を並べ、さらに、

「でも一生暮らすなら、吝々した人は厭やです。此間も妾を受けると言うて



騒ぎなされた客がありました。其の男振には申分がなうても、膽の小さい人でお断りしました。妾は慙ういふ性分ですから、男振なぞは構ひませぬ。大膽でよく父や母を世話して下さる方なら任せます。」

と仄めかす。流石相手も參つて、「親諸共に世話にならうと云ふ孝心から、俺の様な太ッ腹に惚れたと云ふのは無理はない。俺の痘面に惚れる筈はないが、氣前に惚れたとは筋が解つて居る。」

と、自分が自分の氣前に自惚れてメートルを上げる。

裏ごし表

また吝みツ垂れた糠味噌が折々に通つて來ると、

「郎君の様なシメくしりの良い方は滅多に見受けませぬ。妾の様に遊女氣の

ない小心者は、金を湯水のやうに使ふ人には添ふ氣に成れませぬ。先達ても相場成金の人から身受の相談がありましたがお断り致しました。兎角世の中は堅い方でないと一生難儀いたします。父や母が手紙を呉れるたびに裁縫や料理の事を稽古して置いと聞かして居ります。」

と持ちかける。すると、彼方は吝い心から思ひ付き、

「遊女に似合はぬ縮まり屋だ。十分世帯が持てる。里の親達の心掛もよい。

私に感心するのは尤ぢや。」

と自惚させて了ふ。

慙うした筆法で、有らゆる粹客を薙ぎ伏せた手練手管は、流石百練千磨の武者振で、歸する所は對手の自惚根性を利用してベタンに掛けたカラクリ細工であつた。

トは知らず。自分が自分の長所に惚れ過ぎて、巧く鎌にかゝつた男こそ、飛



んだ災難なれ。あなかしこ

(五) 人真似

香物鉢

「これお林！、お前はまた香物鉢を割つたの？」

「はい誠に済まぬことを致しました。どうぞ御免ください。」

「それがお前のいつもの言ひ草で、済みませぬ済みませぬでトツ／＼済まして了ふ手管なんだらう！」

と、口汚く女中を叱るのは琵琶の師匠の女房であつた。

「いゝえ、然ういふ考は夢更持ちませぬ。ツイ私が粗忽を致しまして。」

「粗忽にも程がある。今割つたお鉢はお前の二年や三年の給銀で買へる様な

粗末な物ぢやあありはしない。此間は大事な茶碗を割つて、然う／＼片端から打ち毀された日には、我家の身代は半年と續くもので無い！」

「これ／＼其許は兎角仰山な言ひやうをする。女と云ふものは、何事も優形に言ふものぢや。」

「何も其様な講釋は聞かなくもよく解つてます。」

「解つて居るものか。解らぬから其様な野暮を言ふのだ。能く聞くがよい。此間おれが御殿場の宿に泊つた時、富士は見れば見るほど大きいものぢや」と言うど、宿の女中の言ひ草が面白い。旦那あの方に大きう見えましても

半分は雪で御座いますと言つたが、兎角女は然ういふ風に優しう言はぬと物事が仰山らしうて興が覺める！」

女房聞いて頗る不機嫌。其位の事は言はなくとも解つて居ると云ふ顔付。



隣家の師匠

されど其實一向に解つて居ない。そこで、亭主はさらに

「お前は日頃此町の謠の師匠の繁昌を羨ましく思うて、此間も弟子達から立派な家を建て、貫つたと言うて岡焼するが、謠の師匠の女房はナカク能く出来て居るぞ。」

「よく出来て居れば、良人は何故其の人をお嫁に貰ひなさらぬ?」  
とダゝを捏ねる。琵琶の師匠は呆れて。

「また其様な馬鹿を言ふ。其れだからお前には困つて仕舞ふ。落付いて聞きなさい。お前が其様な事を言ふと思つて、今まで言はなかつたが、此間おれが轉宅の喜びに往くと、其の挨拶が如何にも女らしい。」  
女房は柳眉を逆立て

「何う言ひました?」

「それは俺がお宅の繁昌は全く貴女の御丹精に由りますと言うと、良人は結構一方、また妾は不調法者でございます。幸ひ繁昌いたしますのは、全くお弟子様方や、御懇意様のお引立てでございますと言うてゐた。如何にも奥床しい挨拶ではないか?」

妻は聞いて、

「良人は兎角人の女房や、餘所の女の言ふ事が耳に留まつて、妾の言ふ事は一向聞きなさらぬ。妾はいつも謠の師匠の内儀や、御殿場の女の言ふ様なことを言つて居ります!」

亭主は呆れ返つて、

「お前が此後其様な神妙な挨拶をして呉れれば私も大層安心する。」  
「安心なさい!、妾だつて謠屋の内儀だつて變りはしませぬ。」



と語り合ふ。

質物

此時懇意な客が久方振に遣つて来て、琵琶の師匠に向ひ、

「誠に御無沙汰を致しました。長らく御殿場にお出でになつて居たさうです

が、旅のお疲れも無う、能う肥つてお歸りなされた。」

挨拶の終るを待ち兼ねて、女房は横合から、

「貴下！、あの様に肥つて居る様に見えても、半分は垢です。」

亭主は赤面する。客も流石に聞き兼ね話頭を轉じ、女房に向ひ、

「時に承りますれば、お目出度い。此月は御臨月ちやさうです。一昨年か

ら引き續いての御出所、何よりのお手柄お目出たい事でござります！」

と言へば、女房は鼻うごめかし。

東京の或る郊外に一軒の植木屋があつて、園内には種々様々の木を植ゑて、

金のなる木、貧のなる木、福のなる木、禍のなる木、善のなる木、悪のなる木

と亭主の顔に泥を塗り付けた挨拶振には、主客は勿論、女中のお林も膽を潰して了つた。

(六) 富貴長命

いろいろの氣



が、此處かしこの花壇に咲き亂れてゐた。

スルト、或日のこと、田舎の紳士、東京見物と出かけた序に、此の植木屋に尋ね来て、園内ををいろ歩きしながら、植木の種類の多きに打ち驚き、

「植木屋さん！、如何にも珍らしい花壇だ。能くも此様に集められた。私は國元の學者や、風流人に土産になる木を貰ひたいが、一體ドノ木が宜いでせう？」

植木屋の主人ナカノ心ある者で、園内の一樹を指して、

「左様な方への土産にはあの花の高く延びた木に限ります！」

田舎紳士は立ち止つてシゲノと其木を打ち眺め、

「如何にもはなの高く延びた木だ。一體何といふ名前です？」

「其木の名前ですか。其木は慢氣と申します。一體學者とか、風流人とか云ふものは、高慢のものでありますから、此の木が一番に向きます！」

酒氣、慾氣

田舎紳士は實にもと肯きながら、さらに、アチコチの花を見て、ムラノと茂れる木を指し、

「あの賑やかな木は面白さうな木ですが、一體どういふ花が咲きます？」

「さうです。誠に面白い年の若い人の好く木で、酒氣といふ木です。」

「酒氣？」

「左様。この酒氣から遊び氣が出て、其の遊び氣が色氣になり、色氣が騒氣になり、騒氣が難儀になり、難儀が節季に廻はり、癢氣となつて、果ては親達の勘氣をうけて、此の勘氣から仕方な氣に至り、世に勘當の花咲く木とは此木です。何うですお土産に爲されては……………」

と笑ひながら答へた。田舎紳士は頭を振つて、



「其様な物は御免です。其れでは彼の根の歪むで居る木は何と云ふものです？」

「あれは年寄でも、若い者でも、男でも、女でも、一様に好む木で慾氣といふ木です。」

「成程、其れで何ういふ花が咲きます？」

「お見掛のとほり自然と振けて歪んで居ますから、ヌツと出る枝が望氣で、其の望氣から、勝負氣、相場氣が出て、終には損氣、難儀となり、果ては貧乏の花咲く木です。當節田舎でも大流行の株ですからお買ひになつては如何です。」

と打笑ふ。

恪氣に焼餅

田舎紳士も笑ひつゝ、

「其様な木は眞平です。其れより女達への土産にする木が欲しいものですが有りませうか。」

「有りますとも、女達へのお土産ならば向ふの小さい木が詔へ向きです。」

「併しあの木から何ういふものが出ます？」

「あの小さい氣から出るのは吝氣で、恪氣から鬱氣、鬱氣から短氣、癩氣、狂氣、亂氣も出ます。」

田舎紳士は目を圓くし、

「驚きましたねえ、其様に澤山の氣が飛び出しては仕方がありません。それで、恪氣には何ういふ實が出ます？」

「吝氣には焼餅の様な實が出来ます。殊に此木には水や肥やしを與るには及びませぬ。たゞ朝晩よつて集つて焼き付けさへして居れば、自づと噴まし



う蔓るばかりです、兎角今の世の中は吝氣、欲氣、酒氣の流行る時節だから、ドレかお求めなされては如何です？」

「ドレも面白い木ですが、其様な下らない木より外に良い木はありますまいか？、折角遠方に持つて歸るのですから立派なものが欲しいのです。」

「如何にも御尤な事です。其れならば畑ちがひに出来る木をお目に懸けませう！」

と答へた。

正直木

植木屋は田舎紳士を別の花壇に案内し、

「此の花壇にある木は、今まで御覧になつた物とはまるで違ひます。」  
田舎紳士は植木屋の言を聞いて、先づ園内にある一樹木を見て、

「此木は根から幹まで真直に青々と茂つて居りますが、一體何といふ木です？」

「それは正直といふ木です！」

「如何にも其れで真直ぐに延びて居りますが、一體此木には何ういふ物が出て来ます？」

「此木は今まで御覧に成つた木とは全く違つて、ズツと出るのが徳義と實義で、此の徳義と實義から忠義も孝行氣も出ます。忠義、孝行氣から出るのが仁義禮義で、仁義禮義から出る花が富貴の花で、あの花は何時も枯れず萎まぬから長命木と申します。」

「それはお目出たい木です。私は此の富貴長命の木を貰ひませう。」  
と語り出でた。



富貴長命の道

植木屋はカラ／＼と打ち笑ひて、

「何方でも此木を所望になります、さて持ち歸つてから手入が届きませぬから、大抵枯らして仕舞ひます！。一體この富貴長命の木は手入が六ヶし、酒を飲み過ぎると枯れ、色を食ると枯れ、慾が深うても、短慮でも枯れ、家業不精でも、朝寝贅澤でも枯れ、不忠不孝は根から枯らして了ひますから、逆も貴下の手には育ちますまい。丁度金の儲かる薬は賣れず、無くなる薬の能く賣れたやうなものです。」

と言へば、田舎紳士は怪みながら、

「金の儲かる薬、無くなる薬が東京に有りますか？」と聞く。植木屋の主人、

「それは憚ういふ話です。さる所に金の儲かる薬と、無くなる薬とを賣る二軒の薬舗が出来ると、儲かる薬は飲めば次第に富貴長命となるに關らず、無くなる薬の方が能く賣れたのは、全く儲かる方の薬は、誰も百發百中するど知りながら、最初は苦うて飲み辛い爲です、第一薬方は儉約、勘忍、家業出精、正直知足、實義の六味に、柔和、謙遜、發明、器量の四味を加味し、慈悲を一片入れ、煎じ様は常の通り、人たる道を守つて、能く飲みさへすれば、ドの様な癩氣借金でも、疖症貧相でも全快すること速なるに、何分最初は飲みづらいで、兎角隣家の金の無くなる薬を飲みましたのは何分此方の處方は美食、色と酒、遊所遊藝、相場勝負、喧嘩口論、氣儘勝手といふ風の二十四味を酒に浸して、本しやうが無きを一片入れて、其上に無分別、不養生、短氣、無算用の四味を加へてゐたから、一口なめた所で口障りがよいので誰も彼も頻りに飲みましたが、其中に毒が全身に



泌み渡つて、果ては大病必死難溢の病となり、身代くだけで分散する時に  
幾らも嘆いたものがあります。兎に角世の中には富貴長命が好きと言ひな  
がら、其實爲ること、成すことは兎角金の無くなる方を望む者が多いと見  
える。私の庭の富貴長命の木を折角買つて歸りながら、手入が六ヶしいと  
言うて枯らして仕舞ひなされる方は、つまり金の無くなる薬を飲む癖が付い  
て居るのと同じ譯なのですから、貴下のお手入も何うかと思ひますゆるお  
見合になるが善いと思ひます。」  
と言つて止めた。

されど田舎紳士は是非にと所望して、

「私は氣を付けて手入ますから、ごうぞ賣つて下さい。千圓までは出します  
から。」

「ハ、ハ、ハ、此の大切な富貴長命の木が千圓かそこらの端金で賣れますか

此木さへ能く手入すれば萬は億でも出来るものを……」

と笑ひながら答へると、田舎紳士は實にもと思ひ、

「さらば、いよ／＼幾らで譲つて下されますか？」

と問ひ返せば、楠木屋の主人は、

「貴下いくらくと云ふよりは、此木が御所望ならば善と徳とを山ほど積んでお  
出でなさい。善は錢なり、徳は得なりと云ふではありませぬか。」  
と答へた。

### 撞木のをしへ

此話は實に意味深長で、決して一席の茶話笑話では無い。楠木屋が之に就て  
結論を下だして居る所が徹底して居る。曰く。

「富貴にも長命にも成りたくば、善を山ほど積む事です！。司馬溫公の言葉



にも、

金を積みて子孫に遺すも、子孫必ずしも守らず。  
書を積みて子孫に遺すも、子孫必ずしも讀まず。

陰徳を冥々の中に積み、子孫長久の計を立つるに若かず。

と言つてある。陰徳を積み、心が直ぐに金を拵へる秘傳の種である。酒色、強慾、短氣、短慮や、家業不精に身を奢り、不忠不孝に誠なく、よろづに情薄くして、人の見ざる所にも戒慎せぬ人々は、忽ち貧乏と短命になるものだから、深く慎まねば成りませぬ。要するに、金の生る木も生らぬ木も心の種の蒔きやう一つで。

世の人の、心を打出の、小槌かな

福を出さうと、貧を出さうと

と云ふ歌は、能くも此間の呼吸を述べてある。嘗て貧困な男があつた。或

る知識に參じて、何うぞ私に金の生る木を下さいと頼んだら。知識は忽ち撞木を與へたが、其男は一向に譯が解らず一體どういふ譯で私に此木を下さるのですと聞くと。知識は直に此の撞木は己が職分たる身を働かせて、鉦に當れば鉦を鳴らして、人を善心に向はし菩提にも至らしめる。さりながら我身を浮々と樂に暮らして休むで居ると。鉦も鳴らず身もならぬ。されば、其許も撞木の様には叩き止めば則ち喰ひ止む時なる事を知つて、撞木の様には其身を使ひさへすれば、所謂稼ぐに追ひ付く貧乏なく、我身より自づと鉦の音は出る。由來鉦に鉦の音はあるが、撞木で叩かなければカシと音を立てぬと同じく撞木に撞木の徳あれども鉦なければ打つ事が出来ぬ。人にも福田あれど稼がなければ富まぬ。長命の質ある人も養生を怠れば高壽には成れぬ。されば其方も心の撞木を怠らず。菩提の鉦に應せば、福田古今變滅せざるの音を發し、人をも善に導くの其身其儘金色の金の生る木



に至ると教へると。此の貧困な男は忽ち發明して眞の有福者と成つたといふが、貴下も此處をよく合點して、眞の有福者に成り給へ。」  
と懇に教へ聞かせると、田舎紳士は大に喜んで、  
「御教訓は千萬辱う存じます。今日は先生のお蔭で、私の腹の中に富貴長命の木を植えて貰ひましたから、火難や、盗難の患もありません。誠に有り難い仕合です。」

と言へば、植木屋は

「しかし、油断なさるな。煩惱瞋恚の火難もあれば、人心人慾の盗難も甚だしいから……。」

(七) 他家相續

呉服屋の老夫婦

さる頃、京都に呉服を営む老夫婦があつた。家には相應の身代を持ちながら家を續くべき男女の子がなかつた。そこで、

「恁う年を取つて先が見えて來ると、相續をきめなければ成るまい！」

と老人が言へば、老婆は、

「私も日頃さう思うて居ります。」

「さうだ。何處かに良い婿養子があるまいか？」

と互に相談する内、話極つて親類から貰つた。

されど、其の養子がナカ／＼居付かず。さらに、他の親類から貰つても同様



に居付かぬ。

そこで、手を代を品を代へ、有らゆる親類縁者から養子を貰ひ受けたが、何れも居付かず。長きが百日位居る計で、およそ二十人ばかり入り變つて、誰れ一人として辛抱する者が無い。

従つて、町内の者が寄るとさはると、此の呉服屋の老夫婦に就て、

「まあ何うして彼の家には婿養子の出がはりの多いことぞせう？」

「其れは當り前さ何も不思議はありやあしない！」

「何故？」

「ナゼツて彼の様に六十にも七十にも成つて、十歳や、二十歳の養子が、自分の思ふやうに成らぬと言つて、日がな一日、小言のいひつゞけでは、一生養子は育たぬ……」

「然うです。老夫婦も銘々に若い時の事を少し考へて思ひ遣りが無いと迎も

人の子は養はれませぬ。誠に氣の毒な性分だ。」  
と噂してゐた。

### 十八の養子

さるに、蓼喰ふ虫も好きくで、或る家の息子が老夫婦の事を聞いて、

「彼の家に養子に住きたいものだ、能く人は小糠三合持つたら養子に往く

などいふが、一體他家を相續すると云ふことは格別の手柄である。絶えたるを継ぎ、廢れたるを起すは聖人の教で、天地生々の道理である。」

と思つたものか。或は辛抱の出来にくい家と聞いて、

「修業がてらに一ト辛抱して見やう！」

と思つたものか、或る日、其の親達に向ひて。

「私はあの呉服屋の養子に成りたいと思ひます！」



と相談すると、兩親は、

「あの呉服屋の老夫婦は有名な難物で、之まで親類縁者から幾らも養子を貰ひ受けて、ドレも育たぬ評判者ぢや。其れにお前が好むでゆくのは一體どういふ譯ぢや？」

と聞かれて、詳かに其の思ふ仔細を述べると、親達は得心し、

「兎も角、どうせお前は分家するか、または、他家を相續する身だから、お前が然ういふ見で好むで往く事なら往つて見るがよい。往つた上は是非辛抱しなければ成らぬ。」

といふ事になり、縁を求めてトウ／＼呉服屋の養子と成つた。

### 火に入る夏の蟲

斯くて、いよく呉服屋に入り込むで見ると、果して噂にまさる六つかしい

兩親の氣質、流石に當惑して、

「飛んで火に入る夏の虫！、途方もない所に好むで養子に來たものだ！。成るほど今まで誰一人として辛抱しなかつたのは無理もない、此様に氣むづかしい老夫婦とは、まさか夢にも思はなかつた！」

と愁嘆し、案じ煩ふ中に、早くも二三月を経過したが、老夫婦の六つかしさは、益々募る計で、

「之れでは迎も辛抱が出来ぬ。」

と覺悟し、其日々々を送り、

「之から媒介者の所に往かうか？、其れとも明日親里に往つて相談しやうか？」

と、其心は常に落ち付かなかつた。



養子と障子

斯く此の養子の思案中に、養父は大工を頼むで、新しく求めた障子の立て合はせをさせた。

此時養子は何氣なく、大工がコツ／＼と障子の立て合はせをして居る所を見てゐた。

すると、大工は障子の上を削つては鴨居に嵌め、また下を削つては敷居に嵌め、其上に障子に弓を張つて柱の歪みに合はせ、コトリと敷居鴨居に嵌めて、引いて見ると、障子はサラ／＼と自由自在に動き出した。

何氣なく此體を見てゐた養子は、一ト分別が付いた。

「之は面白い！。鴨居や敷居は始めから家附の物だ。併し障子は新たに他から来た私のような物だ。だから障子の嵌まり工合の良い事は、始から知

れて居る。さるに、障子がうまく嵌まらぬと云うて、家附の敷居や鴨居を削つて、障子を其儘にして嵌める大工はない。嵌らぬ時は新らしく入り込むだ障子を削つて、敷居や、鴨居に合はすやうにする。」

と思ひ、さらに、

「されば、人の家を相續するのは、これと同じ譯で、二た親はモト／＼家附の敷居と鴨居で、養子は外から入り込む障子同様である。さるに、父親が偏窟を止めるか？。母親がお饒舌を止めるかせねば、逆も相續は出来ぬと云ふのは、敷居や鴨居を削つて、障子を其儘にして立て合はす様な無分別である。其様な大工は天下に一人もない。嵌らぬ時には障子の婿養子が、おれが／＼と云ふ無分別を削つて、家附の敷居鴨居の兩親に合はさぬと、工合がよく嵌まる者でない！」

と氣付いた。



此の道理の分別

かく一ト分別ついでから、此の養子の心持はスツカリ變り、養父養母の所作が辛抱しよくなり、トウ／＼其家を相續し終ふせて、懇ろに兩親を介抱して末期を見届けたと云ふ美しい話がある、此話に就いて、心學者は、

「これは曾に養子ばかりの事でない。嫁でも、聲でも、奉公人でも、此話の義理を能く飲み込み、親に向ひ、主人に向ひ、良人に向うと、今までの辛い。悲しい。忌々しいと云ふことが立所に消えて大安樂を得ることは疑ない！」

と教へて居る。如何にも面白い話だ。

(八) 猿澤の池

熱湯攻め

むかし、奈良の猿澤のほとりに市之丞といふ者があつた。

夫婦の間、至つて睦まじく、家は裕かた、女子一人を設け、之をおともと名づけて深く愛してゐた。

さるに、おどもの五歳の時、不幸にも其の生母は病のために歸らぬ旅路に着いた。

市之丞は止むなく後妻を迎へて、此の後妻に一人の男子と、一人の女子とが生まれた。

然るに、おともが九つの春に、市之丞も病にかゝつて歿くなつたから、おと



もは世に便りなき身と成つて、人々は之を不惑に思つてゐた。

おともの繼母はまゝしい心を有つて、おとものを大層惡み、無理の限をつくし我が生じた二人の子には、暖かな着物を仕させ、おともには極寒の時にも、綿の入らぬ着物を着せ、夏は厚き着物をまとはせ、時としては食事をも與へず、氣に入らぬ事があると、直ちに打ち懲らすと云ふ有様であつた。

然るに、おともは少しも恨まず。能く子たるの道をつくし、二人の弟や妹を可愛がつてゐた。

従つて、弟と妹とは、おともを同じ腹の姉のやうに思つて、大層なつき従つてゐた。

さるに、繼母はますく之を惡むで、或る夏の夕、熱湯を盥に入れて、お友に向ひ。

「おとも！、すぐ行水しなさい！」

と言うと、お友は日頃繼母の氣性を子供ながらも知つて居るから、

「早く行水しないとキツとお母さんの氣に召さぬ。」

と思ひ、盥を一目見ると、湯は煮えたぎつてゾツとする程であつた。されど心をすゑて、我が命も之れ限りと覺悟し、既に湯に入らうとする時、十一歳なる弟が大きな桶に水を入れて、此場に駆け付けて盥に水を入れ、

「姉さん！、私が先に入ります。」

と言ふや否や、直に此の盥の中に飛び込む。

すると、弟の身の皮はやぶれ、肉は爛れて目も當てられぬ有様であつた。之が爲に弟は二ヶ月ばかり病の床に就いた。

弟が桶の水を注いですら、尙且つ爛るゝ程の熱湯であつたから、其湯の有様は思ひやらるゝのである。



毒藥

すると、繼母はますますお友を憎み、如何にもして苦しめやうと思つて、或時は熱い酒を茶碗に入れ、之に何か一服の薬を交せて、

「お友！、お前この薬を飲むと一層美しくなるからお飲みなさい！」と勧めた。お友は幼心にも怪しいものと知りながら、

「はい！」

と押しいたゞいて今に飲まうとする時、九つになる妹が横合から、其の茶碗を取つて、

「姉ちゃん！、可愛くなるお薬なら私に飲まして……………」

と言つて、今しも口に附けやうとするに驚き、母は矢庭に其の茶碗を引き取つて了つた。

斯かる無惨なる仕打は數限りなく行はれたが、お友は繼母を恨まなかつた。

猿澤の観音

のみならず其夏繼母が大病に罹つた時には、大層心配して、猿澤のはとりなる觀世音に毎日々々まうでし、繼母の病氣全快を祈り、

「母が命數にて命の盡くる期もあらば、我が命を取り給ひて、母を助けて下さる。」

と真心を籠めて祈るのであつた。お友の孝心神に通じ、母は終に全快するに至つたので、お友の喜は非常なものであつた。

斯くて、此年の八月十五夜の月見の宵に、お友は母に向ひて、

「母さま！、私は之から觀世音様に月見團子を持つてお参りいたし、今年の夏から大願をいたして、幸にもお母さまの御病氣の全快なされたお禮まる



りを致したうござります！」  
 と言へば、繼母は、

「それは神妙な心掛ちや。此母が病氣全快のお禮まわりして呉れるのは嬉しい！。早く團子をお供へして呉れ！。また歸り道に猿澤の池にはまつて死んで呉れよ！。若し誤つて池にはまつて死んで呉れたら、私は満足するから本當の孝行が出来る！」

と世にも憎げなる事をいふのであつた。

されど、お友は此の憎げなる言葉を耳にも留めず。備へ物を取り揃えて、觀世音にまうで懇ろにお禮を述べ、また母の長命を深く祈念して歸途に就いた。

池の明月

道に猿澤の池を眺むれば、いと寂しく、秋の夜の空澄み渡る月影は、鏡の

如く池の水にかゝやくを見て、思はず涙をハラ／＼と流し、

「おもへば物悲しくなる。我が生みの母上が、私の四つか五つの頃に、月見の夜中に此の池の側に伴れて来て、池に映る月を指し、之を見よと仰せられ、また大空を照りゆく月を指しては、上にもノノ様、下にもノノ様、拜め／＼と仰せて、可愛がつて下すつたお言葉は、今に耳に残つて居る。また父上は毎年、月見の夜には、提げ重やうの物をとくのへ、私を伴れて来て、女の子は晴れ渡る望月を拜むと、良い子を生むと云うて、毎年私を伴れて来て下された。それに、今日は父上も母上も此世の人でなく、今宵の月が形見で、亡き父母のお姿が目当り見える様な。」

と獨語て、

晴れわたる、月にあはれの、増鏡

父母の姿の、うつる池水



と詠じ、さらに、

「思へば、此の世に私ほど悲しい身はない、生みの母には幼く別れ、父には九つの時に別れ、まゝしい今の母上さまは、寝ても覺めても、私をお憎み成さつて、たびくの御毒害を企て、危い數々を弟や妹に助けられて来た。今宵もまた出て来る折に、池に落ちて死んで呉れたら、親への孝行と世に心なき御言葉！、之を思うと所詮生甲斐のない身の行末。毒害などで死んで、まゝしき母の悪い名を出して、世に知らさうよりは、亡き父母の形見の月のやごる此の池に身を投げて死んだら、お友は狂氣したと、世の人達が思うて呉れて、繼母の悪名が立たなければ、これも孝行の端にならう？」

と思ひ、さらに

「しかし悲しいことは、亡き母上が私を抱いて此池のほとりに来て、お友早

く大きくなつて呉れと言はれ。また父上は毎年こゝに来て、良い子を生んで呉れとお聞かし成された。其れに私が、今こゝで身を投げて死ぬのは、何うした因縁であらう？、南無大慈大悲の觀世音様！、私は空しく死にましても實の父母に極樂で會はせて下さい！、また跡に残られるまゝしき母に悪名が立たずに。随分長命して下さい。また弟や妹が無事息災で成人して、末廣々と榮えるやうにお守り下さい！。會ひたきは弟と妹、之まで影になり日向になりて、能く私を助けて呉れた。死ぬる此身は厭はねど弟や妹に別れる悲しさ。こゝで死ぬと覺悟がついてゐたら、之までの深切を禮いふて来るのであつた。たとひ私は死んでもお前等二人には、私が付き添うて無事に榮ゆく様に守りますぞよ。」

と言つて、池水に立ちむかひ、



我ながら、我と名残の、水鏡

見るに付けても、思ふはらから

池水に、捨つる此身は、すまざるも

まじしき母の、名をば濁すな

と詠み了つて、池に飛び込まうとした。

あらッ姉さん

此の瞬間にお友の兩袖を右と左に確と掴まへ、

「あらッ姉さま！、待つて下さい！」

止むる聲に、お友は驚いて、ふり顧みると、弟と妹の二人であつた。嬉しさの餘りに、二人を抱きしめ、

「お前達、どうして此處に來た？。私は會ひたかつた。能う來て呉れた！」

と喜びの餘りに、ますく抱き占め、悲しき中にも勞れば、二人は、

「姉さん！。姉さんは池に入つて死ぬの？、姉さんが死ぬなら私も死ぬ！」

と叫び、さらに、

「私等二人は夜寝して居ると、夢の中に観音様がお出でに成つて、二人とも早く猿澤の池に往つて、姉さんをお助けなさい！、姉さんは今池の中に飛び込むから、早く行つて助け、と言はれましたから、私は驚いて目が覺めて、跣足で駆け出すと、妹が道で三度も轉びましたから、つい遅うなりました。姉さんが死ぬるなら、私等二人が先に死ぬ。」

と言うて、二人が正に池に飛ばんとするを、お友は確と抱き止め、  
「お前らはまあ其様に此姉を大切に思つて呉れる！、其志はどうお禮を言はうか？、併しお前ら二人は惻好だから、能く姉さんの言ふことを聞いて



お呉れ。此の姉さんは何うしても生きて居られぬが、お前ら二人は長命して能くお母さんに孝行をして、亡くなられたお父さんの追善をし、また此姉さんの母さんの弔もして、また私の跡を弔うて呉れるがよい！。どうぞ怪我をせぬ様に、稽古を精出して、此姉さんに代つてお父さんやお母さんの御名を揚げて呉れ！」

と言ひ終つて、ヨと打ち嘆けば、二人の弟と妹も聲を上げて消え入る計に嘆き悲んだ。

空には月光さやかに池水を照らし、満目静涼。天神いかに此の友愛の情を見給ひけん。

繼母の懺悔

稍あつて、弟と妹の二人は立ち上つて、

「私等二人はドコまでも姉さんと一緒に行きまする！」

と言つて、再び池水に飛び入らんとするを、お友は、

「お前らは其様の事をしては成りませぬ！」

と押し止むるを聞かず。

「でも姉さんが行くから………」

三人互に争ふ所に、後の方より

「あ………」

と叫ぶ聲がした。

三人はふと氣付いて、凝つと見まもると母であつた。繼母は聲をふるはし涙ながらに、

「お友！、許して呉れ！、私はどうした過去の因縁であらう？。子は三人とも菩薩でありながら、此母は鬼にも蛇にまさる悪心を之まで持つてゐた。



まあ何うした恐ろしい根性であつたらう？。亡くなられた良人への申譯もお友の生みの母にも、お前にも會はず顔がない。先程からお前ら三人の様子を見て居ると、見聞きするほど、私が之までの悪業の、我と我が身の呵責。身に迫まりて生き甲斐の無い大悪人。お友お前は許して呉れても、天道様は許して下さうぬ。お友お前に二人の子供を頼むぞ。また二人は能う姉さんに事へて呉れ！。私は草葉の蔭からお友の榮を守ります……」

と言うて、繼母は直ちに池に飛び込まうとした。三人は必死と力を入れて、母を引き止め、殊にお友は聲をふるはし、

「お母さん！、お廢し成されて下さい！。勿體ない！。私も死には致しませぬ。四人とも睦まじう、生き長らへて、世を長閑に暮らませう。」

と言へば、繼母は

「お前が死ななければ、私も命長らへて、今までの行を改めて、お前にお詫

びする！」

と泣く泣く詫び入るので、お友の弟と妹の二人は大層喜んで、母と姉とを伏し拜み、

「嬉しな！、嬉しな！」

と言ふ顔の美しく絶なるには母も姉も耐えかねて涙に咽ぶのであつた。

かくて、母は觀世音を拜みて誓を立て、多年の非を改め、其後親子四人の睦まじさは、見る人これを羨まぬ者はなかつた。

お友の孝心、二人の弟妹の誠、よく母の悪を改めて、大善人とした徳で、お友ならび弟妹は、他日共に富貴の人となり、母も亦安らかな人となつた。

よしあしは、人にはあらで、我にあり

形直うて、影もまがらず



(九) 手前味噌

自惚女

或る心學者の奥座敷に、ノサバリ出でたる一人の高慢チキの女。襟は二の町なるに、服装の派手やかなる。白粉をコテ〜と塗りたるは一人におかしけれど、此女いさゝかもへり下る氣色なく。

「先生！ 私は長命の傳授を伺ひに參りました。餘計とは申しませぬ。殊に長命も年を取るに付け、皺の寄らぬやう、また腰の屈まぬやう、今日のまゝの美しい姿を變へずに長生いたす傳授をお願いいたします！」

口に任かせてベラ〜と喋り立てる嗜みなきに流石心學者も呆れ果て

「モシ〜龜よ龜さん！、オツと間違つた。モシ〜。お前さん、一體美人

と心得てござるのか？。其の御面相で……………」

露骨に言はれて、此女頗る不機嫌。

「何も大した美人とは思ひませぬが、世の人は私を今小町と云うて呉れますから、其の今小町の姿を何日までも變らぬ様にして長命いたし度いのです！」

「今小町？。聞いて呆れらあ。」

と、心學先生は腹を抱えてカラ〜打ち笑うと、女は聞き答め、

「先生は何うしたのだらう？。此の美人に對して無禮な挨拶！。肝心な傳授をしないで悪口雑言の有りたけ。何か私に恨がありますか？、其れとも私の標緻に迷うての噫言か？」

心學者はます〜打ち笑ひ、

「今小町さん！。まあ怒らないでお聞きなさい！。あなたに聞かせる善いお



話がある。

「どういふお話です？」

「筋は少し長いが神妙にお聞きなさい！。むかし或る夫婦の者があつて、夫は正直者なれど、器量あしく、年は三十なれど更けて四十にも見える。所が其の女房が派手者で年は二十なれど十七八に見える美人であつた。」

「其の私のやうな美人が何うしました？」

「さう話の腰を折らないで終まで聞きなさい！」

「はい！」

「そこで、其の女房がいつも夫を尻に敷いて、自分の器量を自慢し、良人のやうな仕合な人はない。私の様に若う見える美人を女房にしてござる！。併し私は良人の様に更けて見える人を夫にして、此世で一番の不仕合ものです」と不足ばかり言うてゐた。

女わらへ

自稱今小町は何を言うかと疑つと聞いて居ると、心學者は言葉をつゞけ、

「そこで、其男は少からず迷惑したが、或日深山にゆくと、ゆくりなく仙人に出合つた。すると、仙人が此男に向いて其許は正直者だが不心得な女房共に毎日々々いぢめられて居るのが痛はしい！。其れで此の三粒の丸薬を上げるから飲むがよい。此の一粒を飲めば十年若くなつて、其の器量も美うなるから、早速一粒を飲むがよいと教へた。すると、此男は喜んで、早速一粒をのむと、果して二十歳の大美男子となつた。」

今小町ウツゝを抜かして、其先を待ち遠うに聞いて居ると、

「そこで、其男が家に歸れば、女房は仰天して、まあ良人は何うして其様に美しい男に成られましたかと尋ねると、男はお前は誠に仕合者だ此様に若



く見える私といふ男を夫に持つて居るが、私は不仕合でお前のやうな年増を女房にして居ると打笑うと、妻は溜りかね荐りに其譯を聞くから、其男は一伍一什を物語つて、残り二つの丸薬を見せて、此の一粒は今から十年先に飲めば、また二十の若盛り、また其後に十年経つて飲むでも二十。其時はお前は四十の婆々で、いつも二十の若男を夫に持つ譯で、お前ほど仕合な女はないといへば、妻は面目なげに、何うぞ私に一粒下さいと頼む、其男は二十のお前が飲んだら十歳の娘になつて、迎も世帯が持てるもので無い。と聞かせても、妻は我儘者で、良人の持てる二粒の丸薬を奪つて口に入れたから、男は驚いて飲ませまいとする騒に、妻は二粒ともお腹に入れたが最後、オギヤア〜と云うて、良人の膝の上に乗つたといふ話がある、兎角女の前後の解らぬ愚痴を童に譬へて、女わらべと云ふのだ。これッ！。今小町どの、貴様も我が身で我が身の知れぬオギヤア々々々ちやの

う！  
と教へた。

### 赤子の心

されど今小町は合點ゆかず。

「先生！、滅多な事を仰しやるな。聖人も大人は赤子の心を失はずと言はれたではありませぬか？。オギヤア〜が何うしました？」

心學者はと打ち笑ひて、  
「大人は赤子の心を失はぬといふのは、人の性は皆善で、誰も生まれ出た時は、たい天から受けた性のまゝであるから、本體の明かりが常にあきらかである、大人はいつまでも此の赤子の心を失はぬと云ふのだ。さるに兎角世の人達は生まれ出づるや、見るに迷ひ、聞くに迷ひ、其の本來の徳を失



ひ、身を失ふものである。一休和尚も

生まれ子の、次第々に、知慧づきて

佛に遠く、なるぞ悲しき

と言はれて居る。さるに、汝は年取りても今の小町姿を失はず。長命いたしたいといふのは、全く小人ゆる赤子の心を失うて、其の本性に戻り、天命にさかふ事を知らぬオギャア〜だ！。君子は位に素して行ふとある。人は其分に素し、其身の程々を知るのが人間だ！。貴様も篤と我身に立ちかへり自分を考へて見なされ！』

と手厳しく教へても、今小町はナカ〜自惚づよく、忽ち懷中鏡を取り出だし、自分の顔を眺めつ、

「我れと我身に立ち歸りて、見れば見るほど我ながら美しうござんす！」と答へる。

身の程知らぬ者に付ける薬なく、流石心學者も呆れ果て、嘆息し、さらに教へて言ふやう、

「其許の言ふ所もおろかでは無い！。兎角世の人達は、誰も自惚れあつて我を悪しきと思はぬが人間である。」

「如何にも。」

「むかし雲上の坊官に猿坊官といふ名を得た人があつた、所が聞きなさい！」

「はい！」

「此の坊官が或日のこと、去る御殿に參つて、玄關に控えて居ると、ある門跡方の坊官が、後から來て之も玄關に控えてゐたが、此の坊官の顔も能く猿に似てゐたから、先着の猿坊官が挨拶して、貴下のお姿は私によく似て居られる。以後は懇意に御交際を願ひますと述べる。後程に來た坊官は厚く禮を述べ、さて〜君に向へば、我が姿を鏡に映す如しと笑うて、兩



人は一度に手を拍ち、

「猿が我がか？。我が君か？。君が猿か？。君が我がか？」

と陸まじく語り合うと、其處にゐた家中の人達はおかしさの餘り、主人の宮に告げ申すと、おん宮は聞きたまひて、此の二人の坊官に物を給うた。すると、御宮の執事が物を給うた御心を伺うと、御宮は總べて世の人は誰も我身の事を我身で知らず。知らぬから皆我がよき物と思ひ勝ちなるにあの二人の坊官は、能くも我と我が身の猿に似て居る事を知つて居る心の程が神妙であるから物を遣はしたと言はれたので、何れも此のお言葉を有り難くおもひ、不相應の驕りをやめ、不相應の大言をやめ、不相應の賢いげなる顔をやめたといふ事である。兎角見え難いのは我が身の上である。其許が今小町と自惚れるのも、畢竟は誰も彼も皆我を今小町と心得る迷から、我身の悪しき事を知らず。遂に迷ひ／＼て我を失ふものだ。」

と教へた。すると、今小町は、

「いろ／＼承りましたから、何うぞ早く此姿をいくつに成つても變へぬ長命法を聞かせて下さい！」

心學者は聞いて、

「さらば、其許は今朝来て、今は晝時にもなるが、今朝の身と今の身は一つ歟。二つ歟、別もの歟。同じ物歟。」

と聞いた。女は聲に應じ、

「別といはゞ千差萬別。一と言はゞ古今一體。」

と答へた。心學者は更に、

「汝汝の眼を見しや。否や。」

「眼眼を見ず。指指をささず。」

と答へた。此時心學者は黙して静座すると。女は手を拍つて、



「我れ天地と等しき長命を傳受し、古今變滅なき姿を崩さず！」  
と已に克つて禮を作して去つたといふ事である。

### (二〇) 齊家の道

#### 三綱八目

或る人、心學者を訪うて、

「家を齊ふるには一體どうしたら宜しいのです？」  
と聞くと、

「家を齊ふるといふのは、即ち身を修むることで、其身を修むることは、心を正しうし、意を誠にする事だ。

心に正しければ、身も修まり家も齊ふ。されば、誠心正意の外には、別

に修身、齊家、治國、平天下の法はない。

さるに、力を心法に用ひぬ人は、兎角此味を知らず。修身とは唯身の行  
作を修むることと思ひ、齊家、治國、平天下はたゞ人を治むる事とのみ思  
うて、身も、家も、國も、天下も、皆一心の中の働きによる事を知らぬ。  
譬へば、心は燈火のやうなものである。修身や、齊家や、治國や、平天下  
は燈火の光のやうなものである。燈火が明らかであると、光の照らさぬ限  
なく、心明らかなれば萬事は自づととなふから、學問の要は初學から終  
に至るまで唯一心を明らかにするにある、しかし其れぎりでは解らぬ。」  
と言うて、さらに、其入口を教へた。

#### 夫婦和合

心學者が家を齊へる入口を物語つた中に、



「家を齊ふるの要は夫婦の和合が本である。夫婦さへ心が合へば、たとひ他に六ヶしい事があつても、如何やうにも計らはれる。しかし、夫婦の心が合はなければ、他に六ヶしい事は無くても家は治まらぬ。

例へば家の主人が父や母の心を足納させ、喜び暮らせたく思うても、妻が邪見で従はないと、其の孝行の出来やう筈がない。親子嫁姑の間に小言は絶えず。氣を痛める事はかりだ。従つて家は圓く治まらぬ。

若し夫婦の氣が合つて、共々に心を合はせて父母の氣を取り心を付けて事へると、其の孝行は成就して、親子嫁姑の間が親しく睦まじく家が治まる。

例へ一概な父母でも、夫婦の氣が合つて居れば、如何やうにも氣の取りやうがあつて、父母の心は穩やかに成つて来る。

また一家の主人に兄弟があつて、よいやうに世話したく思うても、其妻が

邪見で従はなければ、其の友愛も成り難い。従つて家も治まらず。兄弟姑嫁などの物いひが絶えぬ。のみならず、引いて破断の本になる。

されど、妻が良人と心を合はせて世話する事になると、萬事よく行き届いて、其間が睦まじく家も治まる。また一家の主人が我が子を善に導き育て、其間に交らせ、良い師につけ、質素實體に、家業に疎かならぬやうに育てたく思うても、其妻が奢り屋で、派手やかに育て、高慢に導き、遊藝に長じさせ、遊山に驕らすと、其子は野良息子と成つて、家を立派に相續することが出来ぬ。

されど、妻たる者が能く良人と心を合はせ、我が子を善に導けば、少しは六ヶしい性質の子でも、大方はよく生ひ立つものである。かく夫婦が力を合せて養育しても、子の性質が悪しくして及ばぬ時は、此上は天命であらう。



また一家の主人が家内の者、下女や下男、または、出入の者に至るまで心を付け、情をかけて安らかにしやうと思つても、其妻が邪見で、人情を辨へず。或は肝癩づよく、氣随、氣儘ならば、奉公人は育たず。出入の者は誠をおもはず。其家は自づと衰へて来る。されど、夫婦和合して氣を付けると、何れも和合して如才なく勤める。

また一家の主人が質素を守り、儉約をつとめ、家業に出精し、家を興さんと思つても、其妻が邪見で良人の志に従はず。或は衣を美にすることに耽り。遊山を好み、取締りなく自墮落ならば、良人は如何に矢竹に思つても其事は成りがたい。

譬へば、湯を沸かして水にする様なものだ。是れ全く妻たる者が、良人の福分を破り出世の途をくぢき、遂には自分も良人と共に借金に追はれ、逼塞する類は、世間に幾らもある。されど、妻が良人と心を合はせて共稼ぎ

すれば、如何なる家でも起つて来る。」と述べて居る。

をんなの借上

次に女の借上に就て、

「モト／＼婦人といふ者は、借上の心の深いもので、其の里方の身代がよいと、一生それを鼻にかけ、人に矜る心のあるものだ。其れゆる良人の心に従ひ、其身を下げて、共に勤むることをせぬが、妻たるものは此所をよく／＼合點せねばならぬ。

また良人たる者は、能く／＼之等の人情を知つて、善に導く事が肝要である。要するに、家を齊ふるの本は夫で其夫を助けて家を齊ふるのが妻であるから、夫婦の心が合へば萬事は思ふやうに成る。易に



「二人心を同うすれば其利きこと金を断つ。同心の言、其臭は蘭の如し」とある。

此心は二人が心を合はせて物事をすれば、其の鋭利なることは金鐵をも断ち、其の言葉の香はしきことは蘭麝の如しといふのである。

他人と他人とでさへ、心を同うすれば斯の如くであるから、況して夫婦の心を合はすに於ては一層の事である。

されば、一家の主人は、我が心、明らかに、其身修まらば、先づ妻の心を従へるがよい。而して、妻の心を服るくには、先づ自分の身持を堅くし、茶屋ぐるひ、または、下女に戯るゝなどは堅く禁じねばならぬ。其身堅ければ妻は自ら安心する。

また身分相應の事は、妻の望み通りにするがよい。かくすると、妻のこゝろは自ら足納する。要するに、之は良人の心得で、妻たる者は悪く心得て

致し呉れぬといふて恨むではならぬ。  
たゞし、身代の相應は妻の知らぬものである。妻は夫の賄ひにまかせ、金銀をつかひて、帳面の出入を知らぬから、今年の帳面はいくらの損があるか、また幾らの借金があるかを知らぬ者であるから、身代の相應と、不相應とは夫に問うて知るがよい。」  
と述べて居る。

信心

次に信心の事に就いて、

「さて此の二箇條の行が出来て、妻の心が足納したら、折にふれ縁にふれて妻を柔和忍辱にして、善根を知ること教ゆるがよい。儒道佛道のをしへ何なりとも由り因むやうにしたい。」



凡夫の心は儒佛のお蔭によらぬと安心慈善が成り難い。されど、夫一人の導きではナカ〜至り難いから、良き友に交らせ、また良き師に従はすがよい。

佛者の上にも貴き知識などに見ゆしむるは最も益がある。少しでも邪な知識には近付けぬが肝要で、其の目利が大切である。

若し偏つた考が出来ると、大層の妨げになる。モト〜人の心は移り易いもので、富貴に交際すると、其心おごり、気が高くなり、貧者に交際すると、心が卑しくなり、無暗と人事を言ひたがり、心拙く、口さがなく成るものである。

また佛道者に交際すると、自づと信心が起り、篤實な人に交際すると自づと其心が老成になる。

別して婦人は心の移り易いものであるから、其の交際を慎まねばならぬ。

しかし、此の心得はたゞ妻を導くに限つたことでない。兄弟や、子供、すべて、家内の者、乃至、父母たりとも善人に交るやう計りたい。斯くすれば、人々の心が和いで家は齊ふ。

しかし、其の根本は主人の心一つなれば、家を齊ふるとは、たゞ己の心を研ぐことである。構わて他人に目を付けては成らぬ。」

と教へて居る。

(一一) 金剛心

或る農家の娘

近きころ關東の或る國に、相應の資産を有つた農家があつた。

家には夫婦の間に娘一人に、下女下男が五六人も居た。さるに、此娘が十三



歳の時に、其母が歿なくなつたから、懇意こんいの人が其の主人しゅじんに向むかひて、

「一家は妻つまがなくては治をさまりませぬ。何なにうです。一つ後妻ごさいをお貰もらひになつて

は、貴下あなたが然さういふ御所存ごしよぜんならばお世話せわいたしますが……」

と荐すすりに勸すすむる人があつた。されど、主人しゅじんは思おもひ定さだむる所ところがあつて、

「後妻ごさいを貰もらひ受うけて、繼子まご繼母まごはの間あひだが睦むつまじく往いかぬと誰たれも皆苦勞みなくろういたしま

すから、娘むすめの成人せいじんを待まつて養子やうしを貰もらひます。」

と答こたへて辭退じたいしてゐた。

されど、何分なにぶんにも娘むすめは年としが往ゆかす。家内かないの取締とりしまりをして呉くれる者ものがないと、奉ほう

公人こうにんも育そだち憎にくい。

幸さいひ近村きんそんに相應さうおうの者ものがあつたから、之これを後妻ごさいに貰もらひ受うけると、娘むすめと後妻ごさいとの

間あひだは思おもひの外ほかに睦むつまじく、やがて、後妻ごさいは一人ひとりの男子だんしを産うんだ。

男子だんしを産うんで後のちも、世よにある様やうな繼子まご虐こいぢめもなく、至いたつて睦むつまじいので、主しゅ

人は一方かたならず喜よろこび、月日つきひの過すぎゆくをも忘わすれて家業かげふを勵はげんでゐた。

一夜の寢物語から

さるに、時ときの翼つばさは早はやくも飛とび去さつて、其娘そのむすめは茲こゝに十七歳さいの春はるを迎むかへた。主人しゅじん

は打うちち寛くわんいで、或あるる夜よの寢物語ねものがたりに、

「私も安心あんしんした。此上このうへは娘むすめに良よい聲こゑを取とつて、私等わたくしら夫婦ふうふは新宅しんたくを構かまえて、子

供こどもを伴つれて隱居いんきよしようと思おもうが、お前まへは何なにうおもうて呉くれる？」

「其それは何なによりです！」

「それで私わたしはいよ／＼安心あんしんした。」

と、主人しゅじんは重荷おもにを卸おろした心持こゝろもちに成なつた。

さるに、其後そののち主人しゅじんが所用しよようあつて一夜泊よるまりで、旅行りょこうした夜よるの事ことであつた。

下女げぢよ、下男げなんは其日そのひは里行さとぎを許ゆるされ、其夜そのよは母はも娘むすめも夜よなべ仕事しごとを濟すませて、



其れなく眠に就いた真夜中に、後妻はソツと寢床を出で、娘の部屋に忍び入り襦袢を取つて、前後も知らず眠つて居る娘の咽喉を締めかゝつた。娘は驚きて、急に起き上がり、締めさせまいと力の限りに防ぎ始めた。後妻は焦ら立つて、娘のたぶさを掴むで、裏庭に曳き出だし、半町計さきの野中の深井戸の中に投げ込み、之で何うする事も叶はぬ、死ぬに極つて居ると思ひ、家に歸つて何氣なき體に床に入つてゐた。

里淋しい田舎の事とて、此騒ぎの聲も聞えなかつた。

一體これまで睦まじかつた後妻が、何うして慥ういふ恐ろしい企てをしたかと云ふと、最初嫁入して來る時には、固より慥うした恐ろしい考はなかつた。また嫁入して後も慥うした考は無かつた。

さるに、四年の辛抱をした後に、いよく養子沙汰が持ち上がると、後妻の心は鬼になつた。

「けふ日主人の居られる間は、たとひ新宅を構えても、聲や娘が私等を大切にすることも呉れやうが、亭主の歿くなつた後は根が他人ゆゑ、私や子供は聲や娘に追ひ廻はされてナカ／＼安心が出来ぬ。」

と云ふ邪見を起した。之を物に譬ふれば、恰も質の悪い犬のやうなものである。

犬が子犬と何事もなう睦まじう戯れて居る時は、極めて穏やかで見ると愛らしいが、其處に魚の頭を投げ付けると、俄に牙をむいで至み合ふやうなもので、後妻も養子沙汰といふ魚の頭を投げ付けられて、質の悪い犬の本性を現はした。

魚の頭次第

こゝが讀者の警むべき點で、



「僕は金や女にかけては清浄無垢で、潔白な者だ。」  
 と口廣い事をいふ連中にも、存外誘惑されたり、或は巧に賄賂を引ッたくつたり、埒なき女に迷つて、身を破り家を失ふ代物のあるのは、全く女や、金といふ魚の頭を投げ付けられた経験が無いからである。  
 されば、眞に確實な人物か、不確實な人物か、言葉を換へて言へば、修養の出来た人か、修養の無い人かの試金石は、如何なる職業、如何なる階級、老若男女を問はず、魚の頭に對する態度如何によつて定まる。

井戸底に女の聲

さて井戸の中に突き落された娘は、幸ひ眞直に落ちたので、大した怪我もなく、水際の石垣に取り付いてゐた。  
 かくて、間もなく夜が明けて、附近の人が戸外に出て掃除し始むると、何處

よりか、  
 「助けて下さい。」  
 といふ優しい女の聲が聞えた。  
 不思議におもひながら、深井戸の側に往つて見ると、井戸の底に正しく女の聲がしてゐた。  
 忽ち村人を呼んで引き上げて見ると、豫て優しい評判の知合ふ娘、村人は驚き、  
 「どうして此中に……」  
 と聞けば、娘は上るや否や氣絶して仕舞つた。そこで、益々騒ぎとなつて、一方人を醫者の許にやり早速娘の家に掻き込み、  
 「奥さん、大變な事が出来ました！。娘御が此先の井戸の中に落ちて居られましたから、驚いて引き上げると其儘氣絶されました。」



後妻は之を聞いて、心臓はさながら早鐘を打つが如き有様であつたが、何喰はぬ顔で、

「夜前から居りませぬから、何處に往つたのかと案じて居りました。主人は留守なり、若しや忍び男の所にでも往きはしないかと氣が氣ではありませんでした。思ひ寄らぬ事が出来ました。」  
と態と泣き顔して、世にも憎々しい事をいふ。

蘇生つた娘

村の人達は早速父の旅行先に使を走らせ、一方には醫者か駆け付けて療治するに、娘は蘇つた。

娘の蘇生に後妻は氣が氣でなく、今に逃げ出さうか。自ら井戸に飛び込まうかと荐りに胸騒ぎして、側にも得寄らず、凝つと聞いて居ると、其中の親族

の一人が、

「お前どうして井戸に入つたの？」

後妻は生心地なく耳を澄まして聞くと、

「何うしたのか、昨夜恐い夢を見まして、目が覺めると、井戸の中に落ちて居りました。其れから助けて呉れと叫んだ事は覺えて居りますが、其外は一切知りませぬ。」

と答へて、承知しながらも、後妻の所爲とは言はなかつた。

「其れは不思議な夢ぢや。一體どう云ふ夢であつた？」

「如何にも恐い夢で……………」

「たい恐い夢といふ丈では解らぬ！何の様な夢であつた？」

「其れは覺えませぬ。只恐い事だけは覺えててゐますが……………」  
親類の者や、村の人々は一向に要領を得ず。



「其れなら狸の仕業に違ひない。」

「如何にも然うだ。」

「先づ命が助つて何より結構な事だ！」

と言ひ合つて居る中に、旅行先から父が歸つて、夢の様子を聞いても、娘は親戚同様に答へた。

後妻は此事あつて以來、明けても暮れても、たゞ底氣味悪く思つてゐたか、孝心の娘は一向に色にも現さなければ、繼母に對する應對振舞は聊かも従前に變らなかつた。

天意人言

天に口なし、人をして言はしむ。人間は如何なる場合にも天道の是非を疑ふの餘地はない。村中誰れ言ふとなく、

「あの娘の井戸に落ちたのは、キツと繼母の仕業に相違ない！」

と言ひ出だした。

すると、此事か何日しか其筋に聞えて、後妻は今日の所謂收監となつた。かくて、吟味を受け、

「實は我が生みの子に相續させたい一念から斯様な恐ろしい企てを致しました。」

と白状したので、此度は娘を呼び出だして更に其時の模様を訊問すると、

「あの夜は恐い夢を見た事を覺えて居る計で、井戸に入つた事も上つた事も一向存じませぬ。」

「其れでは解らぬ。繼母がお前を殺さうとして、其果て井戸に投げ込むのだらう。」

と聞けば、娘は、



「いゝる、母は常に私を可愛がつて呉れます。滅相な其様な事をする筈は有りませぬ。多分狸の所爲でせう。」

「でも繼母は既に白状に及んで居る。今更隠くした所で詮ない事ぢや。包ます有りの儘を言はぬか？」

係の人は慊しつ叱りつ、當時の事情を言はせやうとしたが、娘は、

「けれども私は一向に存じませぬ。其れは多分母がお役人さま方を恐れて、左様申したのでせう。」

此の孝女の大至誠と金剛不壞の心には、流石に居並ぶ官吏も、殆んど其の裁きに當惑し、後妻は叱りを受けて村拂に處せられ、娘には、

「お前が日頃ウカ／＼と致し居るゆゑ、斯かる騒ぎにもなる。此後によく

／＼心掛けよ……………」

と言ひ渡しながら、何れも涙を飲んだと云ふ。

此の一處女こそ眞の孝女である。此の犠牲の精神、今人捨て、土の如し。斯くては如何に制度が完備しても、法は畢竟死物に過ぎない。精神なき社會の健全に發達する譯はない。今人の宜しく百誦すべき美話である。

(一一一) 和歌の徳

境遇の子

日蓮上人が身延山に御隠居の節の歌に、

心から、横しまに降る、雨はあらし

風こそ夜の、窓はうつらめ

と云ふ句がある。

雨は本來の性として眞直に落ち來るものである。



然るに、風の爲に横しまに降るが如く、人間の性は清く、美しく、且つ聖なるものである。さるに境遇によつて種々に變化するから、修養によつて境遇に支配されぬ工夫が肝要である。

彼の一本の竹杖で、重い兩掛を支えるのは、全く竹杖を真直に立て、置くからよく支え切れるので、

直ぐなれば、重荷かけても、折れぬなり

世渡る業の、息杖ぞかし

三間間口でも、八間間口でも、一家の主人の息杖一つで、家内中の重荷が持てる。主人の心が歪むと、家内の重荷が引ツくら返り、大黒柱に蟲が入ると、之も同じ事で焼き直すより仕方が無い。されば、蟲の入らぬ間に歪みを直すことが肝要だ。

本は色情から

むかし、去る國に三百石の次男があつた。二十歳ばかりの頃、色事によつて、或る夏の夜に、浴衣に大小のみ、袴も着けず。懐中ものもなく、城下に忍びて遊びに出たまゝ、相思の者と脱走をしやうと思つて、さる友達を訪ねて相談した。

さるに、其の友達なる者が、未だ血氣に逸る無分別ものなれども、有意か無意か幸にも、添書一通を認めて城下から七八里ばかりを隔てた山寺の和尚に紹介して、

「君が此の手紙さへ持つて往けば、和尚はキツと隠まつて呉るゝに相違ない。國元の身分は後から和尚に知らせるから一と先づ山寺に隠れるがよい。」と言つたので、言はるゝまゝに其の一通の添書を懐にして、城下を立ち退い



た。將來の難儀も、途上の困難も、何等の念頭に置かず、  
猫は生臭きを好めども寺に飼はるれば、據なう精進する。蛇はノラクラと歪  
むが性來なれども、竹の筒に入れられると、據なう真直になる。兎角身を寄  
する處が大事である。

遣り付けぬ仕事

さて此男は心からとて夜通しに知らぬ道を一人辿りて山寺に尋ねて往つた。  
之程の働きを親や、主人の爲に盡くしたら、大きな顔が出来るが往き付いた  
所は寂れた山中の一古寺であつた。

兩親の前では無愛想な男が、此の寺の和尚に無暗と辭儀し、例の添書を差し  
出だすと、和尚は披き見て、

「此の手紙の様子では此方に暫くは居られねば成らぬが、當寺は小僧も下男

も居らぬ貧寺なれば、水も汲むで貰はねば成らず、其外拭掃際から、寺役  
のある時は穴も掘つて貰はねば成らぬ。まあ足を洗つて茶粥でも喰ひなさ  
れ。」

と云ふ挨拶。

三百石取の次男も、一本立では僅か三文儲くる術も知らず。懷中には鑑一文  
もなく、言はるゝまゝに庭の隅で足を洗ひ、和尚の喰ひ残しの茶粥を啜り、夜  
通しの疲れを休む暇なく、生まれて以來、遣つた事の無い水汲み掃除。  
今と成つては親の慈悲の有り難きを思へど、今更に國にも歸られず。寺にも  
居られず、外に仕事も無ければ何うする事も叶はず。さながら糞桶に足を踏み  
込んだ様なもので、つまらぬ〜と思ふ中、秋も早や夜寒に成つて來た。

心はコロ〜



衣服どては國から着て来た浴衣一枚ばかりで汗や垢に汚れて居る。  
或日和尙の托鉢に出た後で、客殿の椽に猫のやうに寝轉んで、日向ぼっこりをしながら、熟々と思へば思ふほど寂しい心になつた。

國からは固より便なく、殊に和尙の態度も此頃は滅切り變つて来た。寒空に向つて来た。何うしたら善からう？。腹切らうか、首縊らうか、胸の中は掻き亂れて、見るとも無く麓の方を見ると、村庄屋の内が手に取る様に見える。

村庄屋の家では、寺男が縁の上から見て居るとは露知らず。村人から集めた年貢の數を計へ、やがて、包み直して金戸棚の引出に入れて仕舞つた。

寺男は此の有様を見て、引出に入れた金がゾンとする程欲しく成つて来た。心が有り所にないと、何時無分別が起るやら、實に恐い事だ。

そこで、寺男は獨り自ら思うやう。

「あの庄屋の家内は僅か五人、若し認むる者があつたら蹶散らして金を腰に

付け、京大阪か、または、江戸に出て身の振方を考へやう。所詮この山寺にゐた所で、國に歸られる譯でない。和尙の面癍は悪るし、身の廻りは薄し、立ち退くには今夜が上分別だ。」

と無分別の限を考へ出だした。

心こそ、心迷はず、心なれ

こゝろに心、こゝろゆるすな  
人の心はコロコロと轉げ出す所からこゝろと名づけられて居る。此の寺男は怠ける心から、極めて無分別な事を考へ出だした。

昔から家業を精出したものが盗をしたためしは無い。盗をする者は皆家業きらひである。

一字千金の歌



寺男はいくよ今夜踏ん込まうと決心し、

「今夜は一稼した後に、十里の道を走らねば成らぬ。されば、今の中に緩つくりと寝て置かう。」

と思ひ付いて、目を閉ぢても、胸が騒いでナカク寝つかぬ。

そこで、寝返りをして内の方を見ると、屏風に貼つてある。

相見ての、後の思に、比ぶれば

昔はものを、思はざりけり

といふ色紙の歌が目付いた。

之を見て寺男は何おもふたか、二三返詠み返し、俄に心が變つて

「今此寺に居れば、國からは音信は無く、和尚の面付は悪く、空は寒さに向

ひ、小遣錢はなく、仕おぼれた商賣はなく、仕付けぬ拭掃除が苦しいので

之は詰らぬと思つて居るが、之を詰らさうとして、今夜庄屋の家に忍び込

と本心に立ち返つた。

は國から便もあらう。滅多に狼狽へる所でない。』

時の後悔は役に立たぬ。其れよりは此儘に疑つと辛抱してゐたら、其内に

方が遙に増して、盗んでからツマラぬ時は、昔は物を思はざりけりて、其

のと、今日恁うやつて居てツマラないのと比べて見たら、盗をせぬ詰らぬ

で、天の網は逆も逃れぬ。たとひ京大阪に出て立身した所で盗人の名は通

れぬ。また今日露れるか、明日は召捕になるかと、人の囁く聲も膽に耐

て、廣い天地の間に、五尺の身體の置所がない様になつた時のツマラない

ひで金を取るか若し見咎められて切殺すかする、よく金を盗みおふせた所

一字千金、和歌の徳、學問の徳は茲にある。中納言敦忠の戀歌も、見る人の

心によつては斯かる教訓を與へる。



今日の有難さ

さて其後國元から親類が尋ね来て、和尚に厚く禮を言ひ、山寺の苦難を逃れたが、一旦出奔したもののゆるゑ、當時の掟として國元には歸られず。其儘町人となつて商業を勵み、家運繁昌して歴々の人物となつた。

思ふに、此の寺男は實に能く其の本心に立ち返つた人である。百人に五十人は此の立ち返りが出來ず。只我が身が可愛いと思ふ所から、何日しか其心を歪めて仕舞ふ。

目が可愛い所から無暗と面白い物が見たくなり。耳が可愛いから三味線太鼓で遊びたくなり、鼻が可愛い所から香水の匂が嗅ぎたくなり、口が可愛い所から蒲焼、茶碗むし、天麩羅と漁つて行き、又身體中が可愛い所から家業が稼がたくなり。

そこで、次第に貧しくなつて、此様な苦しい所帯を持つよりは縦令死んでも一ト奢り。奢つて死んだら一生の思ひ出、誰が百年生きるもの歟、明日死ぬも來年死ぬも、おもへば同じ短い命だ。疊の上に往生するも、河原で野タレ死するも、死ぬ味に變りはない。

されば、今夜何處かで盜をして、貳參百フンだくつて、思ふ存分に驕り散らして、死んで仕舞ふ方が埒が早いと云ふ捨鉢の輩がある。

所が其れが盜みおうせること歟。端金を盗まうとして、思ひの外に引ツくられ、獄屋にネチ込まれて、始めて氣が付いて、我が身體が我身に自由にならず。固の貧乏が反つて有難くなる。之も昔は物を思はざりけりの筆法である。のみならず、法庭に呼び出されて呵責の苦を受くる時は、獄屋の中が戀しうなり。早う獄屋に返つて休みたいと思ふ、之も昔は物を思はざりけり。

さて其の罪人の判決が濟むで、死刑の宣告を受けた時は、何處が戀しいぞ。



呵責はおろか、骨をひしがれても命さへあらばと、元の水責火責が戀しくなる昔は物を思はざりけりて昔が戀しくなる。

人は兎角今日の有難さを忘れて、外を願ふ所から、思ひの外に心が歪む。されば人は苦しみに生れたの歎、否かと言へば、安樂は人の生れつきである。

樂がしたくば、

心を知りやれ

樂は心の生まれつき

此樂な心を有ちながら苦むで狼狽へる。

つまり明らか本心を有つて生まれて居るから、樂はごの様にも出来るものを兎角自ら苦むで一生を暮らす連中が多い。

されば、人は其日々々々を感謝して、努力の功を積み、人事を盡くして天命を待つの外は無い。

(一一一) 夫婦喧嘩

歌人の氣轉

去る歌人の隣家に住める夫婦のもの、兎角不和合で、朝から晩まで目の覺めである間は、犬も喰はぬ夫婦喧嘩。

流石の歌人も氣の毒に思つて、或日この夫婦の者を呼んで、いろくの響應をなし、さて言葉静に、

「貴方がたお二人の平常不和合なのは誠に氣の毒だ、日ごろ御意見しても一向お聞き入れなさらぬ。しかし朝夕修羅を燃やす事は情ない事で、第一一家も治まらず心も身も苦しいぢやあないか。兎角物は言ひやうで、何でも無い事が双方の氣障りになる事もあるから、何うです明日から喧嘩の仕



様を變へては………」

「はい面白い喧嘩の仕方があれば代わります。」

「喧嘩に面白い喧嘩もないが、一つ歌人の隣に住んでござる縁で、明日から

は夫婦で、互に言ひたい事は歌で言つて貰ひたいものだ、然うすると、悪

口も少しは上品に聞ゆるぢやあないか？」

夫婦とも厚き馳走を受けての教訓、今更否應の段でなく、

「宜しうござります。其れでは明日から悪口を三十一字に詠んで遣らかしま

す。」

と答へて、其晩は機嫌よく眠に就いた。

### 面白い歌の争ひ

かくて、翌朝目覺むるや、何か氣に障る事があつて、良人は妻に向ひ、言

荒々しう。

「己の様な見憎い猿づらに赤土を塗つた嬬を、俺ならこそ八年と十年と辛抱  
して居るのだ。有り難くおもへ！」

と口汚く罵るを、女房は聞き答めて、

「お前は昨夕お隣の先生から聞いた事を忘れたか？、それが三十一文字の歌

か、悪口にも程がある。」

怒れる女房を抑えて、

「黙つて聞け！。およそ歌には前置といふものがある。今のは其の前書とい

ふもので之から正味の歌を聞かせてやるから、能く耳をさらへて聞かよ

い。」

小豆餅の、やうな面をば、膨らかし

猶焼餅を、やくたいもなき



だ。何うちや解つたか？」

妻は聞いてますく腹を立て、播鉢に味噌を磨りながら、心は宙有に飛びつ

又しても、又悪性を、すり鉢の

嬬の顔まで、味噌を塗りやるか

と返歌した。

良人は負けじと、更に二三首を詠んだが、何しろ初心の事とて、容易に出で  
ず。此日の喧嘩は自ら收つて、双方ともに引き分けに成つた。

### 歌と四季の心

すると、其夜に歌人が訪れて二人に向ひ、

「何うでした？、今日の喧嘩は………」

「はい、先生どうも歌では喧嘩が致し憎いので困りました。」

「さあ其の仕憎いのが何よりのお爲ぢや。どれ歌をお見せなさい！」

と言つて、二人の歌を取り上げ、之を讀み了つて、

「此歌は初心には如何にも善く出来た。其れでは明日から、四季の心を入れ  
てお詠みなさい！」

「四季の心を入れるとは何う致しますのです？」

「それは別段六ヶしうは御座らぬ。御亭主が先づ春の心を入れて詠みなさる  
と。嫁御は冬の心を入れて返歌しなさるのだ。又御亭主が秋の季節を入れ  
て詠むと、女房は冬の季節を詠み込むで受けなさるまでの事で造作はござ  
らぬ。されど、只氣を付けねば爲らぬ事は、歌といふものは心を素直に持  
つて、假初にも人を敵とせず我身に立ち返り、恩を仇で返す心が本意であ  
る。此心の誠が通れば、天地神明の感應があつて、其身は榮えて心が安心



である。」

と言ひ聞かせるど。夫婦は

「能く解りました。何れ明日からは四季の心を入れて詠みまする。」  
と誓つて、歌人に別れた。

例の十八番

斯くて、翌朝また例の十八番が始まつて、良人は

「待て〜今日は春の心を入れて詠まねば成らぬから少し隙取る。よし出来た〜。」

散ればこそ、いと櫻は、めでたけれ

内の嬾めも、早う死なぬか

妻は之を聞いて、口惜し涙を流しつゝ、

「能くも其様な事が言はれた。」

不如歸、啼きつる嬾は、長命し

阿呆阿爺の、跡に残れり。

亭主は聞いて、ます〜怒り出し

秋が来て、顔は紅葉の、面憎や

はらが立田の、山の神めが

、、、、、、

山の神めが、山の神めが、大焼餅の山の神めが。」

女房は溜らず、今に喰つてかゝらんず勢であつたが、やがて

「夜前お隣の先生の言葉に、歌は其身に立ち返り、仇を恩で返す優しき心を  
天地神明も守り給ふと言はれた。」

と思ひ返し



寒氣より、烈しく當る、親爺めへ

熱酒一杯、飲ましやりたや

冬ふゆの季節きせつで返すと、亭主ていしゅは忽たちまちち機嫌きげんを直なほし、

何なんといふ、うまさ歌うたぞや、歌うたのごと

早はやう一杯はい、飲のまし貫もひたや

と答こたへた。

女房にようぼうは直ただちに上じやう爛らんを勸すすめると、亭主ていしゅの喜よろこび一方かたならず。其日そのひは常つねになく和合わがひの姿すがたが見みえた。

反省のちから

すると、其夜そのよも歌人かじんが訪たづね來きて、事ことの仔細しさいを聞きいて大おほに感心かんしんし、

「嫁御よめごの上じやう爛らん一杯はい飲のましやりたやの句くは如何いかにも面白おもしろう能よく出で來きかしたつた

此上このうへは下しもの句くをあげるから、明日あすよりは上かみの句くをつけて喧嘩けんかしなさるがよ

『』

と思おもひ掛かけない挨拶あいさつ。亭主ていしゅは驚おどろきながら、

「先生せんせい喧嘩けんかはますく仕憎しにくうなる計はかりです。一體たいどういふ下しもの句くを下くださるので

す?』

「其それは御亭主ごていしゅには「勘忍かんにんするが家の福徳ふくとく」といふ句くをあげ、御女房ごにようぼうには、

「負まけてさへ居ゐりや其身安心そのみあんしん」といふ下しもの句くをあげます。」

かくて、歌人かじんの歸かへり去さつた跡あとで、亭主ていしゅは妻つまに向むかひ、

「恚いかう段々だんだんと面倒めんどうに成なつて來きる事ことなら、寧いりろ喧嘩けんかをしなすが増ました。」

と笑わらうて床こに就ついた。

さるに、翌朝よくあさ眼覺めさむれば忽たちまちち喧嘩けんかを始はじめ、亭主ていしゅが、

憎にくい娘めかけ、横面よこめん一つ、喰くはそと



勘忍するが、家の福德

之では何うも面白くない

と思ふ所を女房は

去るならば、金澤山に、付けてくせ

負けてさへ居りや、其身安心

と詠んだが、何うも下の句との釣合が悪いので、未だ言ひ出さぬ中に亭主は

我れよきに、嬢の悪きは、なきものを

かんにんするが、家の福德

と詠み出だすと、女房は興に入り、

何事も、我をあやまり、従ひて

負けてさへ居りや、其身安心

と返歌した。亭主聞いて、喜ぶこと一方ならず。

「さて〜能く出来た。女の道は其處にある。其心から福も、壽も、子孫の榮えも出来る。考へると、今までは俺が皆悪かつた。我れよきに嬢の悪きはなきものを、今こそ漸く解つた。」

何日になき懺悔に、妻も氣が氣でなく、

「勿體ない。何んの良人に悪い事がありませう。私が可愛がつて貰ふ事に付けた上つて居りました。女は順ふが道で、負けてさへ居れば可愛がつて貰へるものを、我と我で憎まれましたが、今氣が付くと安樂世界です。」

「然う云うて呉れると私も耐らぬ。一體女といふ者は心小さいものであるのを、今まで大人げなく相手にして居たのは悪かつた。家業精出し、酒飲まず、悪性せねば、世の中の女房に鬼は無き者を

女房は、愛する物と、知りながら

晝は粗末に、せしぞ愚や



と言へば、妻は涙を流し、

「いーえ、私が悪うござりました。兎角をんなは少し良人が結構になると心驕つて持病や癩氣を後循にして、我と迎へる火の車、良人は高きも低きも表を勤め、家職家業の心勞多く、其上世の世話事おほきに苦勞の重荷を知らず。お粗末にして居りましたのは誠に済みませぬ。

良人には、従ふものと、知りながら

夜のみごころ、思ひしぞうき

と詠み、夫婦大笑して、其後は睦まじく和合の中に禮を保つて家を齊へたから、家運繁昌、子孫長久の基を開いた。

此話は一見滑稽の如き感あるも、徐ろに其の内容を玩味すれば、實に徹底的に、且つ實際的に、夫婦間は勿論、人間社會の輯睦の要が説かれてある。

(一四) 天命

本心と私心

鐘馗大臣の繪には其側に鬼が小さうなつて居る。これは君子の腹の中である。本心の鐘馗大臣が正しいから、私心の鬼が小さうなつて、たゞ

「はー！、はー！」

と云うて這ひかゝんで居る。

聖人でも、君子でも、身體のある中は私心がなければ成らぬ。されば、君子は戦々競々として慎む。

日々新に劍を磨いであるから、其の劍光に恐れて、鬼も小さうなつて、顔出しする事がならぬ。



されど、小人の腹の中は鬼が大きいなつて、本心の鐘馗大臣が小さくなつて居る。

其れは全く剣を磨かぬからだ。従つて、スリコギの様なものである。さればいくら振り廻はしても、恐い譯がない。そこで、私心の鬼が大きくなつて、

『おれが〜』

で、家内一杯になつて亂れて来る。これが天命の性に従はないで、人慾の私に従ふからである。

例へば、夜の寝しなに風が吹く、本心は氣を付けるが、身體の私心が不肖皮を引ッ冠つて、

「最う善い！」

で寝て仕舞ふ。

そこで、寝入つても安心が出来ぬから、夜がな火事の夢やら、突き落される

夢などにおそはれる。

モト〜道は天より受けて居るが、其道を踏まず、矢鱈性に負くから、迷ひ通しになる、心こゝにあらざれば、化物が出たり、幽霊に取り付かれたり。一家親類の顔が睨むやうに見えたり。世間の人の顔が鬼の様に見えて、一生狼狽へ仕舞ひになる。

すべて化物に出會うたといふのは、向ふから見せるか、此方から見ると、能く考へて見るがよい。

### 天命の誤解

要は放心といふ氣隨氣儘の所から来るのである。

「君子の道は他なしたゞ放心を求むるにあるのみ。」

とあるが、實に其通りである。然るに世には放心にまかせ、何事も天命と言



つて、天命の勘違ひをして居る仲間が多い。  
茶碗を一つ棚に上げるにも遣り放しにして置くから、一寸さわつても落ちる。  
直ぐに破れる。

「はあ之も天命。」

といふが。何の之が天命であらう。之は放心したのである。また

「此様に眠いも天命。」

と言ひ、或は

「此様に酒の飲みたいも天命。」

と言ひ、悪所がよひをして、夜露に打たれ、長く病氣を煩ひ、

「之も天命。」

といひ、終りには菰をかぶり、

「之も天命。」

といふ者もあるが、一體この様な天命がどこにある。皆我まゝ氣まゝの天命である。

### 放蕩息子

或る所の遊蕩息子が、商賣不精で、酒飲むで遊び暮らし、兩親は次第に年は寄る。息子は次第に強くなる。

従つて、兩親は氣の痛めどほし、寢ても寢就かず、寢所で父親が、

「あの伴めは未だ歸らぬか？、毎晩々々、外を家にして出あるき、一體何になる積りぢや。あれでは私等の行末は何うなるかも知れぬ。」

と呶すと、母は

「是非もないこと。足元の明るい中に了見を極めねば成りませぬ。」

といふて夫婦の相談中に、表の戸の音がする。



夫婦は共に疑つと寝た振をして居ると、息子は酒機嫌で、鼻歌をうたひ、ヒヨロ／＼足で、父親の頭に躓き、

「御免なされ！」

と一口言つて段階子に上り。階子の中段で手でいたゞく真似して二階に上つた。母は聲を潜めて、

「あなた！。今のを御覧じましたか？」

と聞くと、父は、

「おし知つて居る！。あれ程に酒に酔ひながら、私の頭につまづいて、御免なさいと手で戴く真似をして二階に上つた！、まんざら親の大切を知らぬでも無い。」

と答へると、母はさらに

「然うです。自分の心に何とも思はぬ者なら、あの言葉は出ませぬ。明日で

も彼れの了見を聞いて御覧なさい！」  
と述べた。

親の慈悲は有り難い。そこで、明日になつて息子が、遅く起きて飯食うて、またブラ／＼と出掛けかけると、父は呼び止め、

「こりや。用事がある！」

「私に！」

「うむ。」

息子は不精々に引き返すと、父は、

「お前は其様にいつも／＼出歩いて仕舞は何うする積りぢや。最う勘當しやうと思つてゐたのだが、昨夜二階に上りしなに、己の頭に躓いてお許し成されと云ふたが覺えて居るか？、其れなら親の大切な事を知らぬでもあるまい。其心なら早う其志を改め、チツとは親の氣を痛めぬ様に、性根を



入れ代えて呉れ。」  
と叱ると、息子は聞いて、  
「ふうん、ゆふべ躓いたのは親の頭か？ 私に酒徳利と申うて戴いた！」  
と答へた。

放心一點張の者

放心一點張の者には、此様な大間違がある。

「おれが〜。」

と通す連中は、皆酒徳利いたいく輩だ。

親の長命を有難しとも思はず。家屋敷や、諸道具に辭義して居るものが幾らもある。

また婦人などは、内の身代の潰れるをも構はず、呉服屋や、化粧屋などに義

理を立て、世間にのみ氣を張つて居る者がある。  
之等は皆酒徳利を戴く放蕩息子と同然である。全く天命に背く大間違である。  
之が手細工の天命である。  
誠の天命とは自然にして逃れぬ所の事である。されば、能く天を敬ひ畏れて  
各人の身を修むる事は、貧富貴賤、老若男女の別なく、束の間も忘るべからざる務である。

(一五) 方 針

柳は緑、花は紅

長田の庄司、煙草片手に燻らしながら、磁石を見て、  
「ハテ不思議なものである。如何なる山中でも、如何なる海上でも、西も、



南も、東も指さす。何時でも劍先は北を向いて居る。ハテ合點が往かぬ！」  
と言へば、磁石は笑ひ顔に、

「我が劍先の北に向ふのを不思議がらるか？」

「如何にも不思議で溜らぬ。」

と答へる。磁石は笑ひつゝ、

「何も不思議はない。其元の煙草の吸口がいつも口に行くやうなものだ！」

之は何うした譯か考へて御覽。我が劍先は北に向ふのが、天理自然、煙管

の吸口が人の口に何うしてやら行くのが自然！」

と述べ、さらに

「子は何うしてやら親に孝、家來は何うしてやら主人に忠、水は冷めたく、

火は熱く、柳は緑に、花は紅、何うした譯か知らぬが、是が天理自然、之

に逆へば天理に違うて、身を亡ぼす、之に就いて、其元にお尋いたす。我

が劍先が西に向うと、之は珍らしいと云うて用ゐて呉れますか？、または  
不肖の磁石というて憎み捨てますか？」

と聞くと、庄司は

「磁石は北を指すから、人が之を益ありとして重寶するのだ。若し劍先が西  
に向いたら、其の効能がないゆえ捨てられて仕舞ふ！」

と答へた。

### 劍先のキリく

之を聞いて、磁石は改まり

「たとひ小人なりとも、道心なきにあらざれば、其元も磁石の善惡は辨へて

とぞある。」

と一喝し、さらに、



「然るに、汝は忠をつくすべき臣下の身として、主人を殺して、敵に事へて用ゐられると思つてござるか？」  
と責めかゝり、  
「斯様な不義非道の輩は、人憎みて汝をば牛裂に會はして呉れる。」  
と言ひさま、磁石は怒つてキリ／＼と舞つて、其の劍先をば庄司に刺し付けた。

警語

すると、周章狼狽して、  
「まづ／＼お怒りを鎮めて下されませ！」  
と述べ、さらに、  
「實は我のみならず。世の中の息子や、手代に、私等のやうな者が澤山居り

まする！」  
と言つて陳謝した。  
すると、磁石はますます怒つて、  
「貴様は、私に會つても未だ方角を辨へぬか？」  
と責め付けた。  
此の例話は實に面白い。中澤道二翁の教にも  
「世の中で悪いといふのは、善い教に従はぬと云ふ程わるい物はない。」  
と云うてあるが、實に其通りである。  
然るに、兎角悪例は屢々辨解のために用ゐられるのが小人である。  
小人は善教を聞き、または、善人に接しても、恰も長田庄司が方向を指す磁石に會うても、其身を顧みざると同様である。  
従つて、之等小人はますます邪路にフン込むで、果ては、惨めな末路を見る



に至るは、昭々たる事實である。

(一六) 心の鬼

數の子に木耳

或る心學者の話に憊ういふ面白い誠がある。

去る學者が死んで極樂にゆくと、極樂の一室に澤山の木耳と數の子とが積むであつた。亡者の學者は之を見て驚き、

「觀音様、あの澤山の木耳は佛様達の食物でありますか？」

と聞くに、觀世音は

「あれは木耳では無い。人間の耳ぢや！」

「あれが人間の耳で？」

「如何にも人間の耳ぢや。人間が娑婆にゐるころ、美言を聞いて實にもと思ひながらも、行のよからぬ奴は耳ばかり極樂に来て、身體は無間地獄に落ちて了ふ。」

と云ふ仰であつた。

「さらば、あの數の子は何うしたものです。佛様には生臭ものは御禁物と聞きましますか……」

「佛の前に生臭ものがあるものか。あれは人間の舌ぢや。娑婆にゐた時、口に仁義道德と説きながら、其身が修まつてぬと、身體は地獄に落ちて舌ばかり此處に来る。舌の干物であるから、數の子のやうに見える。」

といふお諭であつた。此話の筋は如何にも面白い。善心善行は申分ないが、幾ら善心でも行ふ所が成つて居らぬと仕方がない。善い事は嘘にしても極樂となり、悪い事は嘘にしても地獄になるといふ一つの物語がある。



恐ろしい企

或る頃、京都に大層仲の悪い嫁と姑があつた。嫁は苛責に堪えかねて、或時は四五日も里に歸つて見たが、さて二人の子供のいとしさに引かされて、縁家に歸ると、又もや姑に虚められた、結ばれた心から空恐ろしい考を起した。

「姑さへ居なければ妾等夫婦と二人の子供とは無事に治まつてゆくが、姑が居ては何日までも治まらず、四人の者が生涯難儀する。知れぬ様に死なせたい。」

と思つて、日頃懇意な醫師を訪れ、四方山の話の末、

「先生少し事情がありますから、申兼ねますが毒薬を分けて戴きたいのです。」

「毒薬？。途法も無いことを言はるゝ。一體どうしたのです。」

「實は詳しくお話ししなければ解りませぬが、妾の姑が………」  
と語り出だして、虐待の一伍一什を物語り、強ひて毒薬を分けて貰はうとすると、醫師は言葉穩かに

「承知しました。しかし、其代りに私の言分も立て、下さい。およそ、天命の生ある人を私怨を以て殺すと、其報が早かれ晚かれ廻つて來ます。子供が死ぬか、良人の氣が觸れると云ふ事になりますから、今日から三十日の間、貴女が行を成さらぬと可けませんぬ。」

「毒薬さへ内々で下されば、三十日は半年でも仰せの行をいたします。一體どういふ行でござりますか？」

「行と言つて六ヶしい事ではありません。只三十日の間、姑御に一言も口答へなさらぬ事で、姑御が何の様に無理を言つても、たゞハイ／＼と素直にする事ですが、其れが出來ませうか。」



「其位の事は如何様にも我慢いたします！」  
 「其れでは先づ今日の歸りから土産を買つて姑の機嫌をお取りなさい。何を言はれても只ハイ／＼で腹を立てゝは成りませぬぞ。」  
 醫師の教のまゝに嫁は、其の歸路で姑の好む焼餅を買つて家に歸り、大層晴れ／＼した顔で、

「母様ツイ遅く成りました。御退屈でしたせう。此のお土産を暖かな中に召し上つて下さい！」

平常に變る仕打なれども、姑は不興氣に、

「此の物の高い時節に澤山ある様にお錢を遣つて貰ひますまい。明日の惣菜を買うなら格別のこと。世帯知らずにも程がある。」

その小言。されど、嫁は醫師の教を守つて、たゞ、

「はい！、はい！」

の挨拶。

かくて、晚餐になると、嫁は姑の好きな胡麻味噌を作つて、

「母様。夕食を召し上げ！」

姑は起つて膳部につき胡麻味噌を眺め。

「これは榮耀な。私は何日の香物で澤山！」

と、當て付けた様に臺所戸棚をガタ／＼と開けて香物を出だし夕食済ませて煙草盆引き寄せ、煙吹かせながらギロ／＼と嫁の素振を睨むと云ふ有様。

嫁は少しも逆はず。良人や、子供の食事済ませ臺所片付けて後

「母様！、日がな一日ジツとして居られては退屈で御座りませう。少し肩を揉むで上げませう。」

母の側に寄つて撫でかゝると。

「其様にして貰はいでよい。」



「はい！、はい！」

と引き下がり、燈上げ、線香立て、姑の着物たゝみ、子供寝かせ、用事終りて姑の側に來り、

「床を延べませう。お休み遊ばせ！」

姑は之までとは勝手が違つて、

「まあ此人どうかしたの？、私はまだ床を延べて貰うほど老碌しては居ないよ」

「はい。はい。」

と答へ、稍あつて蒲團冠れる姑の裾を押へタゞき付けなごし、枕屏風を立て、引き退がる。

只はいくゝの行

嫁の心では高が三十日の辛抱と思つて、其夜は安らかな眠に就いた。

翌朝目が覺めると、嫁は平生よりも早く飯ごしらへし、家の内外隈なく掃除し、姑の室に來て、

「最うお日成りませぬか？」

と挨拶する。昨日までは姑が床の中から、ガミ／＼と皺枯れた聲で叱り立つるが常であつたが、今朝は寝過ぐして嫁に先を越され、何處を見ても非難の打ち所が無い。

嫁は姑が手水を使ふ間にチャンと膳立てし、姑の座る時には、煙草盆に火を容れ、火鉢を整へ、場取して待つてゐた。

人の心はかゞみ

かくて、姑の食事濟ませて後、妹の許に往くと言つて、醫師の許に訪れた。



醫師から聞かると、歸宅以來の様子を手取るやうに物語ると、醫師は奇麗な重箱を取り出して蓋を開き。

「此餅の中に例の物を仕込むで置きました。急に効験が見えると目立ちまするから、自然と利く様にして置きました。昨日もお話したやうに高が三十日の事ですから……」

「何から何まで有り難う存じます、妾ども夫婦四人が助かります。」と答へて、重箱提げて歸り、

「只今歸りました。」

言葉優しう挨拶しても、姑は空嘯いて居る。嫁は如何にも憎々しく思つたが此處が大事と手をつかへ、

「妹があなたに上げて呉れと言つて之を托けました。」

と重箱を差し出すを、姑は引き寄せて一つ二つ喰つて後に、佛壇の下に入れ

て了つた。嫁は之を見て心の中に、

「うまく嵌めてやつた。」

と思ひ、之を手始に其後は、姑の退屈する時分を見計つて、或は茶を入れ代へ、例の餅を焼きなごし、三度の食事には姑の好む物を拵へ、これも澤山に拵へると氣に入らぬから、少しずつ拵へて機嫌を取り、寢起には撫で擦るなど、孝養おさく怠らなかつた。さしもの姑も驚いて、

「此頃は何うしたのだらう。嫁が此様にして呉れると、何も腹を立てる筈はない！。どうも合點が往かぬ。此間から打つて變つての素振。たゞはいは

「さ」

姑はソロ／＼夢が覺めかゝり、また何となく恥かしく成り、

「面妖な。嫁には悪い所はない。何うして之まで辛く當つたのであらう？」

と本心の光明が雲霧を拂つて現れた。一方嫁の方では、三十日と高を括つて



張りつめた孝行をするので、姑はいよ／＼恥かしく成り。

「嫁は何處も悪い所はない。それに今まで何んで憎んだのか知らん。私が悪かつた。末期の水を呉れるのはあの嫁の外はない。其上可愛い我が生みの子に連れ添ふ嫁を之まで憎むだのは恥かしい。」

と料簡が、スツかり入り替り、其後は姑の方から機嫌を取り、

「これ此の寒いのに早う了ふて、炬燵にお當りよ。」

「はい！、妾は寒うござりませぬ。お母さんは今日の様な日には持病にこたへませう。」

「持病は此間から大分よいから案じないで。」

嫁と姑との睦まじさは、餘所目には羨ましい程であつた。

鬼を佛にした

固／＼嫁の心は嘘である。なれども身體の働が眞實であるから、姑は日に日に嫁が可愛くなり、これまで吝嗇であつた姑が、長持に了ひ込むだ物を取り出し、

「これをお前に上げよう！」

「でもお母さんが不自由でせう。」

「なんの不自由があるものか？、年よりが物を溜めて何に成らう。」  
 姑も慙ういふ風に其心が段々と面白う成つて来た。

また或時は箆笥の抽出から、色々の物を取り出だし、

「これお前の下着はきつう損じて居る。之を着なさい。」  
 と惜気なく與へる。心持さへ嬉うなると慾はなくな成る。足納すると爲ぬどの胸の中に、地獄もあれば極樂もある。



姑の顔が日増にニコやかに成るに伴れ、嫁の顔は次第に沈んでゆく、姑は打案じて、

「お前此間から大層顔色が悪い。どこか悪くはないか。今煩うて呉れては子供が難儀する。早う醫者に診て貰うて用心しな。何か欲しいものがあれば取り寄せようか。」

眞實の我子を勞る様な態度。嫁の胸算用はガラリと外れ、

「まあ妾は何ういふ邪見な心に成つたのだらう。佛婆様のやうな母上を今まで鬼の様に思つて殺さうなごとは勿體ない。」

嫁にも光明の心が現れた。

「雲晴れて後の光とおもふなよもとより空に有明の月」で、人は善い心を有つては居るが、悪心の雲に閉ぢ籠められ勝である。

嫁は最初姑を殺す氣を起したが、其身の美しい孝行によつて姑が佛になつ

た。

口ばかりでは役立たぬ

されば、口でどの様な立派な事を言つても、心で何の様な立派な事を思うても、我と我身に實現せぬ限は役立たぬ。嫁は今耐らなく成つて、早速醫師の許に駆け付け、自ら爲せる罪を詫び、

「先生どうぞ此間からの毒の消えまする藥を調合して下さい。」  
と頼み入ると、醫師は喜んで

「よう眞心になつて下された。醫は仁術、なんで私が人に毒を勧めませう。此間の餅には毒を入れては居りませぬ。貴女の張りつめた心から、殺さうと思はれたのは、よくくの事と思ひましたが、双方に過の無い様に色々考へて、彼様にしましたが、首尾よう參つたのは此上もない事です。此



末長く孝行を大切にして下さい！」

と、語り終つてハラ／＼と涙を落した。

此の醫師が智識であつたからこそ双方に傷かず。事は圓く治まつた。若し然うでないとな何の様な事が起つたかも知れぬ。

此様な事は大小の差こそあれ、品を代へて幾らもある。なれども縦令向ふから無理を持ちかけても、三十日と高を括つて居れば、三十日と經たぬ中に首尾よう濟むべきものを、一日二日も努めないで、暇にあかして小言ばかり言うて仲の直らぬのは、コロ／＼と轉げゆく、心の鬼の所業。さても淺ましき人の心かな。

(一七) 犠牲

烈女の一心

神風吹く伊勢の國、鈴鹿郡川崎村に、近きむかし江戸屋と云ふ相應の農家があつた。

主人は養子で、妻は家つぎの娘、娘の母と三人暮らして、外には召使の者ばかりであつた。

其後に妻は橋彌といふ一男子を設け、橋彌が三歳の時に、さらに、一女子を生んだ。

そこで、橋彌に乳母を取り、出生の女子は近村に里子とし、引き續いて生まれられた女子も里子にして居る中に、先方で病死し、其後引き續いての誕生や、



且つは、主人の世帯の持方のよからぬ所から、次第に借財が殖えて、果ては困窮に成つて仕舞つた。

そこで、家内の諸道具は固より、田畑まで賣り拂つても、猶借財の辨濟が済まぬといふ破目になつたから、妻は之を思ひ煩つて病死し、跡は散々になつて村人に合はす面目なく、主人も養母も他國に影を隠し、残る者としては、乳母と橋彌と二人であつた。

乳母は其名をおとせと言うて、心立極めて優しく、且つ雄々しい女であつた。江戸屋に奉公して、最初の三年は給銀を貰ひたれ、其後は主家の没落のために所謂只奉公。

之が爲に實家からは、荐りに暇を貰ひ還れと勧めたが、おとせは其心に主家の状態を見て、

「養母と言ひ、主人と言ひ、心得方がよくない。何れ遠からず家名斷絶する

と見はれる。然うなると、此の橋彌様が不使で耐らぬ！」  
といふ俠心一片から、衣類調度を悉く賣り拂つて金に代へ、其金を親里に送つた。

其中に主家は没落した。そこで

「此上は生涯身を堅め、橋彌様を守り立て、江戸屋を再興させなければ……

……」

と覺悟を定めた。

### 何事も志一つ

斯かる大願なれば、人の力の及ばぬ所。かゝる折にこそ神佛の力を借らんと海山かけて百里の路をたゞ一人、讃岐の國象頭山、金びら大権現に跣足まゐりをし、神前に跪き、主家を恢復する志を告げ、三つの願立をした。其の願立



の内容は、

「田舎にて若き女の一人住居なれば、心弱くては敵ひませぬ。又人に疑はれぬ爲に、先づ第一に鐵醬をふくませぬ。第二に髪に油を使はず、第三は元結尺長にて髪を束ねませぬ。」

と堅く誓つて國元に歸つた。おとせは此時年は三十。

容貌美はしく、また盛りを過ぎた年と云ふのでは無い。さるに、忠義の爲に身を構はず。一途に主家を恢復せんとする美はしさ。

古人も念々こゝに在つて忘れざるを志といふと言つてある。畢竟あれは出来ぬ。これは出来ぬといふは志の足らぬ爲である。

志が碎けると氣は腐つて了ふ。其氣が腐ると箸一本持つも懶く、返事するのも厭になり、荷旦に頬膨かし、間がな、隙がな居睡り計して居る。

さるに、志が立てば氣は引き立ち、女の身でも百里の道を跣足まわりが出

来る。況んや、疊の上で能く親兄弟に事へ、主人に事へ、家業出精の出来ぬ筈はない。

### 一家離散の後

かく主家は豫ておとせの推量に違はず、不幸にも一家離散の憂目を見るに至つたから、おとせは村方の頼母子にかけ込むた金が抽籤に當つて、金五兩と銀十匁を善種金とし、形ばかりの小屋に住み、他人の田地四反を預り、橋彌を看護りながら、田を鋤き草を取り、肥を荷ひ虫を拂ひ、夜は夜なべに時の移るも知らぬ。

朝は暗きより起きて、東雲白む頃まで、草履草鞋を作り、其隙には織つむぎ裁縫の業をなし、有らゆる艱苦を凌ぎつゝ、たゞ橋彌の成成することを楽しんでゐた。



さるに、橋彌が成長して、十歳となつた頃には、温しく素直に育ち、常におとせの側で、手仕事を助け、誰れ教へねどおとせを乳母とは言はないで、

「かゝ様、母様。」

と呼んでゐたのは、全くおとせの眞實が橋彌に徹した爲である。

さておとせの親里には、おとせの産み落して置いた實子の文五郎が、之も十歳になつたから、おとせは此の文五郎を呼び寄せて、橋彌と共に一年あまり學問させた。

其後人に頼むで文五郎を江戸に奉公に遣つた。其の精神は實子を、自分の手許で育てると、知らず識らず主人の子を疎かにすると云ふ考からであつた。

斯くて、おとせは橋彌が十八歳になるまで、朝夕の食物も、我が身は疎食に甘んじ、橋彌には常の食を薦め、橋彌は

「母様！、々々！」

と呼べど、自らは主従の道を踏むでゐた。されば、おとせの宿願は遂に達して、橋彌の十八歳の時に、元の屋敷地を買ひ戻し、四間許に七間の家を新築し其上に馬を買ひ、小者一人を召使ひ、田地一町四反を作り、前に家出して生き残れる老母を迎へて、安らかに之を養ふ様になつた。

烈女の感化

さて橋彌が主人としての平生を見ると、極めて眞面目で常人に變つてゐた。或時馬を買つて之を飼ひ試むると、非常に良い馬であつた。そこで、橋彌は、

「此様な良い馬をよくも博勞ごのが世話して呉れた。禮を言はなければ成らぬ。」

と思つて、銀二匁を懐にし、博勞を訪ひ、

「此間は誠に良い馬を世話して下された。少しなれどお禮の印に之を差し上



「げたいと思ひます。」  
博勞は聞いて驚き、

「世間の人様達は、良い馬を安く買はれると、買ひ得と心得。また間違つて安く賣つた時は、知らぬ顔で買得と思つて御座るが、其中で江戸屋の若主人の様に、跡から禮に來られる人は、數十年來博勞を渡世にしてゐますが實に珍らしい事でした。」  
と人々に語り傳へてゐた。

また橋彌が耕作の際に馬を曳いて、三里を隔つる若松浦に米を着けて通ふ時には、おとせは必ず其日の馬の飼ひ葉を一日分を持たせ、剩さへ三つの大きな握飯を拵へて、之を橋彌に持たせ、

「馬の脊を打ち替へる時には、必ず此の握飯を一つ喰べさせ、また若松に往つて荷を卸した時に一つ。其れから歸る途中で、残りの一つをお遣りなさ

101

と云ふのであつた。

おとせは嘗て小屋住居の當時、難儀苦勞を重ねた折に、物を憐む心ありながらも、人に物を施す事が出来なかつたから、セメテの志にとて、自分の食料の黍や稗を、毎朝少しづつ小鳥に施してゐたと云ふ事である。

さておとせの實子の文五郎は如何にといふに、又大人しく奉公怠りなく、江戸表から朋輩と同道して松坂に來り、其れより母を尋ねて川崎村に來て暫く逗留した。

かくて、程經て松坂に歸るついでに、伊勢の兩宮に參詣する事に成つたからおとせは橋彌も諸共拜禮させる用意を整へ、

「文五郎は御主人を頼むで、奉公に出した上は、善きにつけ惡きにつけ、私がおとせは格別大切の身なれば、道中



で假初にも浮々しないで、飯もり女などに必ず相手に成る事はなりませぬ  
若しや病ひでも受け、身に疵の付く事があつたら、親御の家を相續しても  
恥を雪ぐといふもので無い。返々も身を清淨にして參詣なされませ。此の  
乳母は従いては參りませぬが、貴下が身持の悪い事を道中でなされると、私  
は内で直に知りますぞ。能くくつゝしむで參宮なされませ。」  
と懇ろに意見したといふことである。

此の烈女の美はしき犠牲の精神は實に懦夫も振起する佳話である。

(一八) 慎 獨

君子と小人の別

君子は其略ざるところを戒め慎み、其聞かざるところを恐れおそると云ふ言

がある。中江藤樹先生の教に、

「道は譬へば水の如し。人はたとへば魚の如し、魚水にある時は悠然として  
樂む。水を離るゝ時は苦む。離れて久しき時は死す。」

と言はれて居る。

實に此の教のどほりて、人が人の道を勤めて居ると楽しいが、さて人の道に  
離れると苦しい。人の道に離れ通しになると、首を縊るか。身を投げるか。斬  
られるか。殺されるか。何れ死ぬ事になる。

要するに、小人と君子との違は、失策つても懲りぬのが小人、失策らぬ先に  
用心するのが君子である。

誰しも恐れ慎む心のない者はないが、小人や、凡夫の悲しさには、人の見る  
どころ、人の聞かぬところでは、ナカ／＼慎むで用心して居るが、さて人の見ぬ  
所、人の聴かぬ所では、ごの様な事をしてよいと心得、氣隨氣儘を振舞ふか



ら、鼻がへこんで来る。

さるに、偉人傑士は人の見ぬ所。人の聞かぬ所をいよく大事と慎む。君子は屋漏に恥ぢずとは此事である。然るに、小人は之と對に、

「これは人の見ぬ所ぢや。これは人の聞かぬ所ぢや。是程の事は構はぬ。之の式の事は知れまい。」

と云ふ獨合點して、ツイ／＼道の無い方に頭を突ツ込む。其果ては心易う渡られる世の中をば無理無體に苦む。或人の歌に、

岩根ふみ、からたち分けて、行く人は

安き大路を、過ぎがてにする

とあるが、朝から晩まで岨道を横這ひする蟹仲間が多い。

### 家の礎

要するに、人は能く其獨を慎むで、銘々の家業を大事にしてゆく事が肝要である。

全體銘々の家業は、御先祖からの仕來りの業で、此の家業を始める事は一朝一夕の事で無い。時に或は雨にそぼぬれ、雪に打たれ、喰ふ物も得喰はず。着物も得着ず。口惜い目も勘忍したり。難儀な事も辛抱したり、千辛萬苦して、家の礎を立てたものである。

されば、其の子孫として、一旦家業を定めて、之に従事した上は、勝手氣儘の根性から、

「此の仕事は引き合はぬの。畑仕事は嫌ひだの。此様な小商しては渡世にならぬ。」

なご、兎角餘所事に目がついて、餘所事にも相應の苦心あるを知らず。只餘所の花ばかり見て、百姓が商を始め、商人が醫者になり、いろ／＼に化け



て来る。

考へて見るがよい。引き合はぬといふ商賣でも、埒の明かぬ細工でも、相應に收利を上げて居る家がある。さるに、今更渡世になぬといふのは、全く家業に精の籠らぬ怠りと、一は分限不相應の費から来る。

たま〜、據ない事情で、家業をかへるは止むを得ぬが、其れを手本にして滅多に家業を代へるのは、鶴の真似する烏の様なものである。

### 貧寺の和尚さん

さる貧村の和尚さん。急に賽銭を得やうといふ了簡から、

「どうも有り來りの本尊あみだ如來は古めかしく、世間に類も多い。當節の世の中を見渡すと、子を産むことが流行る。されば、子安の觀音を本尊にし、安産の守を出したら、寺門の繁昌は疑なし。」

と思ひ付き、俄に阿彌陀を觀音に仕かへ、寺の門前に、

「本尊は子安の觀世音。」

と墨黒々と看板に書き付けた。すると、參詣の人々は膽を潰ふして、怪むで門内に入らなかつた。そこで、和尚は氣を焦ら立て、

「之では可かぬ。」

とまた工夫を變へた。

翌日は辨財天、或は金比羅、弘法大師と思ひ出のまゝに取り替へ引き替へ、日々本尊を仕かへると、後には猫の子も來ぬやうに成つた。

無暗と家業替をしたがる人は、此の和尚の仲間で、從來の家業如來を大切に居れば、參詣は門前に市をなし、賽銭は米麥、錢金、雨の降るやうに、元日から大晦日まで上り通しであるが、兎角此の和尚の様に、本尊を仕かへるから、參詣は日々に減り、従つて寶物を賣り喰ひにすると、本堂は忽ち大破にな